

第2回 横浜市ひとり親家庭自立支援計画策定連絡会

日時：平成29年11月1日（水）
午後2時から午後4時まで
場所：8A会議室

次 第

1 開会

2 議事

- (1) 第1回連絡会会議録について
- (2) 自立支援計画（平成30年度～平成34年度）素案（案）について

3 その他

4 閉会

【配付資料】

- 資料1 第1回連絡会会議録
- 資料2 自立支援計画（平成30年度～平成34年度）素案（案）
- 資料3 自立支援計画（平成30年度～平成34年度）素案 概要
- 資料4 施策展開の考え方
- 資料5 横浜市ひとり親家庭アンケート調査 結果報告書（参考資料）

第1回横浜市ひとり親家庭自立支援計画策定連絡会 会議録	
日 時	平成29年9月6日（水）14時～16時
開催場所	松村ビル別館6階 603会議室
出席委員	<p>（有識者、支援団体等）（50順、敬称略）</p> <p>白藤 香織（公益財団法人横浜市男女共同参画推進協議会 事業企画課長） 高橋 智一（母子生活支援施設カーサ野庭 施設長） 濱田 静江（社会福祉法人たすけあいゆい 理事長） 田邊 裕子（社会福祉法人横浜市社会福祉協議会 地域活動部長） 本間 春代（本間法律事務所 弁護士） 松田 利花（マザーズハローワーク横浜 統括職業指導官） 道下 久美子（一般財団法人横浜市母子寡婦福祉会 理事長） 峰松 雅子（横浜市民生委員児童委員協議会 理事） 湯澤 直美（立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科 教授）</p> <p>（行政職員）（機構順、敬称略）</p> <p>中澤 智（鶴見区こども家庭支援課長） 西川 洋子（西区南浅間保育園長） 柴山 一彦（瀬谷区こども家庭支援課長） 石川 裕純（横浜市中心職業訓練校長（経済局雇用労働課担当課長）） 磐村 信哉（建築局住宅政策課長）</p>
欠席委員	鈴木 茂久（健康福祉局生活支援課長）
開催形態	公開（傍聴者0人）
議 事	<p><議題></p> <p>（1）次期計画の方向性と考え方について</p>
<p>【資料 1 次期計画の方向性と考え方について（案）説明】（事務局）</p> <p>（1）○質疑応答・意見交換</p> <p>① <u>前回策提示（H25年度）からの社会状況の変化について</u></p> <p>（事務局）：第4期目の計画となるが、前回の計画を継続して実施していくことが基本ではあるが、社会情勢としてより先鋭化している課題は何かを考えた時に、こんなことがあるだろうという事を出した。不十分なこと、気づいた点など出していただきたい。</p> <p>中澤委員：昨年の児童福祉法の改正が非常に大きかったと思っている。子どもが権利の主体であると認められたのは、社会情勢の大きな変化の一つであると考えている。</p> <p>② <u>第3期の振り返り（現行の第3期計画の取り組みの振り返りと見えてきた課題について（資料1 2p～3p）</u></p> <p>（事務局）：3pの「養育費の確保の項で法律相談のニーズが高まっている」ことに関して、法律相談を行っている立場でご意見があればお願いしたい。</p> <p>本間委員：ひとり親サポートよこはまで、養育費セミナーも行っているが、ここに書かれていることはそのとおり、と思う。ここで特にこう変えた方が良いという意見はない。</p> <p>（事務局）：就労に関するミスマッチが課題であったり、実態調査では収入が増えているという</p>	

結果だったが、就労面の支援について、マザーズハローワークの中でお気づきの点をお願いしたい。

松田委員：ミスマッチは、その方々によって価値観も違う。お子さんのそばにいてあげたいお母さんも多いので、出ている求人とは合わないケースもある。子どもを安心して家においておけるのが難しいのかなと思う。

(事務局)：全体を通じてお気づきの点があればお願いしたい。

白藤委員：住宅の確保のところで、市営住宅の優先枠が不十分とあるが、民間住宅あんしん入居の実績が、成約が1人、0人と低い数字だ。今後も継続するのか、何が課題かをお聞きしたい。

磐村委員：民間住宅あんしん入居は、ひとり親世帯だけでなく、高齢者や低所得者の方も制度としては対象としており、利用者は、高齢者と生活保護の方が多実態である。これは継続していく。国交省と厚労省だが、国の方で、新しい住宅のセーフティネットの制度をスタートすることとなっている。「あんしん入居」は横浜市の独自の制度であるが、国の制度は、民間の空き家を使って入居しやすいしくみを作るという制度であるので、これをさらに並行して使っていこうと考えている。それとは別に、市営住宅のひとり親世帯の優先枠や子育て世代だけが応募できる枠なども広げながら考えていきたい。

磐村委員：国の制度の柱には二つあり、一つは、ひとり親に限らず高齢者などが入りやすくするために、民間のオーナーさんに登録していただく「登録制度」の創設。もう一つは、収入に対する家賃助成ができる制度となっている。市としても、この制度を前向きに検討していきたい。

道下委員：会員の中にも、市営住宅に6回申し込んだが駄目であきらめた方がいる。今の倍率はどのようになっているのか。

磐村委員：住宅により、応募者が多いところと少ないところとは、まちまちである。また、優遇倍率というものがある。連続して当選できない場合には、5回、10回以上の応募で当選する確率が上がっていく。

道下委員：母子家庭は収入が少ないので家賃の負担が大変である。

磐村委員：市営住宅の対象は、ひとり親世帯の方だけではなく、所得の低い方などいろいろな場合の方がいるので、バランスを取りながら実施している。高齢者の方にも優遇枠を設けている。

磐村委員：市営住宅の倍率だが、4月募集の平均で11.3倍、子育て世代の倍率は、1倍のところから、人気のある所では、20倍位のところまである。市営住宅は郊外部に偏在している。駅の近くは倍率が高くなっている。

湯澤委員：4p～5pの部分、父子家庭の持ち家率が確かに高いが、賃貸住宅の割合が3割近くになっており、前回よりも比率が高くなっている。母子は賃貸で、父子は持ち家という書き方ではなく、父子でも3割近く賃貸がいるという示し方が良い。また、平均住居費は、持ち家、賃貸、公営住宅か分類して平均額を出した方がわかりやすい。速報の表には、賃貸の区分だけでその内訳として更に公営住宅の比率が低いということを出していただきたい。

田邊委員：今、子ども食堂や、地域の緩やかな見守りが期待されているところだ。子供の居場所など子どもを見守る場所は、140か所くらいあるが。子ども食堂をやっているが、本当に支援の必要な方々に届いているかが、地域の方々の悩みである。本当に支援の必要な子は来ていないのではないかと考えている。親の所要で食事がとれないで痩せてくる子や父子家庭の子で、小学生の子が夜遅くまで一人でいなければならないとか、夜の見守りをしなければならないような状況での、関係機関、特に学校などの連携は重要である。子どもの情報はデリケートで拡散しないようにしなければならないが、しっかりと連携をしていかなければならない。その辺を含めて次期計画では、連携に取り組んでほしい。

湯澤委員：アンケート調査の中間報告での37pに勤務時間帯の結果が示されている。社会的問題として24時間・365日経済が指摘されているが、深夜や早朝、終日の勤務が1割程度あり、そのような時間帯に勤務せざるをえない状況と、72pでの子どもだけで留守番をする頻度についても、決して見逃せない。19時以降に子どもだけで留守番をすることがほとんどないとの回答は7割ぐらいしかなく、残りの3割にどのように手当てをしていくのが重要なところである。この調査は小学生の子どもが対象なので重要である。

濱田委員：児童家庭支援センターを運営しており、子どもの地域の居場所を作らせていただいて2年目になる。子どもたちがイキイキとただいまと返ってくる夏休みが過ごせた。25人登録があり、学習支援とご飯を食べる形である。夜8時まで居ていいことにしているが、夜8時だとだいたい親が迎えに来ることが出来る。利用している方のほとんどが母子家庭であり（寡婦の方もいるが）、就労も、法人の中には人手不足の事業も多くあるので、親も雇ってしまっただけで丸抱えをしている。地域が、そういう人たちを差別しないで、偏見を持たずに、「ゆいさんだったらまるごと抱えてくれるよね、だったら協力するよ」と、緩やかにうまく繋いでくれる地域力があつたからうまくいったと思っている。発見した子どもをどのようにつないでいくかはデリケートな問題なので、個人情報課題もあるし、何回も何回も自治会の町内会長さんや主任児童委員さんにこういう風に繋いでほしいというお願いを具体的にした。食事も栄養価の計算はしてありますけど味付けはこんな感じです、と実際に食べていただいて、これだったら皆さんも食べに来れますか、というような準備をきちんとする、説明もきちんとする。そして、子どもには、100円持てば、勉強したご褒美に100円でご飯が食べられるという説明の仕方をした。貧しいから不憫ではなく、ここへ来れば、地域みんながいて優しくしてくれて、当然あなたは権利があるからここでお母さんを待ってようね、ということが定着して2年目になる。

もう一つ、貧困の連鎖、世代間連鎖というような、結婚もしていない若年母子が地域にはたくさん住んでいる。このような地域に埋もれている若年層のお母さんたちが、児童家庭支援センターや「おさん」とかでの社会制度・社会資源が見えて、幾分感じているようだ。中卒ではなかなか就職できないという現実も理解し始めると、定時制に入り直して勉強したいが、その間子どもを誰かに見てもらえるのかという相談が、児童家庭支援センターに1件、2件にとどまらず来ている。父子家庭でも同様なことがある。

そのような、トータルコーディネートというか、色々な世帯が抱えている課題を民間と公が連携して解決するようなこと（仕組み）が必要である。南区は、特に動きが良いので、生活支援課、子育て支援拠点、虐待対応チーム、など様々な部署があり、そういう人たちが連携して一斉に動くといっぺんに効果が上がる事例をたくさん経験してきた。この計画の考え方は横浜市の全体の18区の考えであり、計画なのでこれでよいかなと思うが、更にこれまで苦労して作ってきた社会資源をどう周知していくか、素晴らしい社会資源を横浜市全体にどのように周知していくかをぜひ書いていただきたい。

峰松委員：生活困窮者に向けての事業をやろうと考えた時に、生活困窮者という事を看板に掲げるわけにいかない。そこで、学校との連携を密に取りながら、緩やかなキッズカフェのようなものを作って、そこへ来た子供たちに主体性を持たせてやらせながら、民生委員が遠くから緩やかに見ている何かおやっという事があった時には、すぐ学校と連携し主任と行くというようなことをしている。目配り・気配りをしながらの活動で、寄り添い方、学習支援等にも少しずつ会を持ちつつあるところだ。その中で、昨年1回実施したキッズカフェで、学校の間口を広げていただき、学校との信頼関係を持つように努力をしてきているが、一回限りではなく持続することが一番大事だと現場では考えている。

(事務局)：関係機関との連携、トータルコーディネートというのは、「公」と「民」と「地域」の連携で、地域で形は違うが、トータルに動いて、その地域に合ったやり方をして、うまくいっている事例がある、という事を周知していくことが必要だと認識した。

田邊委員：区ごと、地域ごとに差がある。南区や旭区のように行っている地区もあれば、あまり子どもの事業が活発でないところ、また、NPOなどの支援団体があるところなどいろいろである。そのような中で、横浜全体の地域力を向上させていくことが重要だと思っている。そのためには、先ほどから出ているように、「公」と「民」と「地域」をトータルコーディネートしていただけるとよい。

濱田委員：横浜市は素晴らしい政策を行っている。朝8時から夜9時まで開いている「地域ケアプラザ」がある。もっと活用した方がよい。横浜市はたくさん色々なものを持っているので、新しく作るのではなく、皆がたくさん努力しているものをうまく繋げることが出来るとよい。

湯澤委員：児童家庭支援センターは、重要な仕事をして下さっていると思っているが、実績一覧の中では、子育て短期支援事業に含まれるかと思うが、先ほどの取り組みは、この中にはないのか。

濱田委員：これとは別の独自の取り組みである。

湯澤委員：児童家庭支援センターという社会資源が、もっと独立して出てきてもよいと思う。項目の説明の中に出ているだけでは重要性が全く見えない。広く開かれている制度だが、就学援助制度が独自の事業として出ているのであれば、児童家庭支援センターも独自の項目として扱った方がよいと思う。直接的な子供の支援のみならず親のニーズに対応していることが、実績一覧では全く見えずにもったいない。

濱田委員：18区に展開していないのでまだ項目出しは難しいかもしれないが、大きな支援の力になっていると思っている。若いお母さんがもう一度勉強してちゃんと自立したい

と夢を語ったことはうれしかった。

(事務局)：児童家庭支援センターの取組みは必ずしもひとり親だけではないが、短期預り事業等は養育に課題のあるご家庭への支援として欠かせないものである。文脈の中にあるだけではなく項目出しすることで、その役割を明示していくことも重要と考える。

濱田委員：南区は5年もやっているのだから、区役所の窓口から、「こういうケースが受けられるか」などと相談の電話をかけてきてくれる。こども家庭支援課など含めて区の窓口の動きがとても良い。相談をすると色々出てくる。今まで相談をしないでやってきた父子家庭などよくやってきたなと思うこともある。365日・24時間経済を担う事で、収入を得ているお父さんがいかに多い事か。コンビニの夜中の配送業務といった深夜の勤務が問題、お母さんが亡くなり子どもの居場所に困っている。毎日ショートステイはできないので、どうしようか困ることがある。

湯澤委員：「子どもの貧困対策は子ども食堂」のようになってきているが、そのような対処だけでなく、ショートステイなど多種制度を国の主要な事業として位置付けなければならないと考える。

濱田委員：児童相談所の一時保護は措置なので、そうではなく、親が自立し、子どもの未来を切り開くためにもっと一時保護的な預りをうまく使える機能があるとよいと思う。しかし、児童家庭支援センターで全部は受けきれない。夏は150人受け入れている。それでも半分は「おさん」に渡している。去年は300人であった。夏休みは、子どもが伸びる、親も変わる。そのあたりを工夫して欲しい。

湯澤委員：夏休みの大変さは学童保育でも聞く。子どもの長期休暇中の支援は大事だということである。

濱田委員：地域の中では、子どものことをやりたくてうずうずしている団塊の世代がたくさんいるのではないか。

(事務局)：地域の担い手が高齢化しているといわれる中で、子どものことについては、やりたいという人がたくさんいるという認識している。

田邊委員：地域の機運は高まっている。

濱田委員：企業の託児室がもう少し広がってくるとよい。企業に託児室があると若い人が就労しやすい。

(事務局)：区社協さんを通じて、子ども食堂を含めた子どもの支援活動について、どのような支援、どんな一押しがあったらやりやすいかをたずねたアンケート結果をまとめた。その結果、一つは、安定して行っていくための一定の資金、マンパワー、場所、食材などが挙げられている。運営の場所の問題、人の問題、マネーの問題に関して、なにがしか一定のサポートがあれば自分たちもできるのにといいご相談を区社協さんの方に受けている。去年の夏ぐらいにアンケートをさせていただいた結果ではそのように受けとめている。

田邊委員：空き部屋もこれから増えてくるので、そのようなところとか空き店舗とかを活用しいろいろなところで活動したいという場合もあれば、住んでいる自宅を開放して高齢者の支援を行いながら、子ども食堂をやられたりしていることもある。そうすると、子ども食堂が高齢者の居場所になったり、交流の場所になったり、みんなの場所になったり、本当にいろいろここ一、二年の間に急速に広がっている。

濱田委員：民生委員を退職したので、家が広く、寂しいし、ボケてしまうという事で、家を開放して、サロンとして開放している元民生委員の方がいる。多世代の方が来ることが出来る場所である。

本間委員：資料には早期の支援や中長期的な支援が書かれていてその通りだと思うが、10pにはそのようなことが読み取れない。そのようなことが読み取れるように入れていただけないか。

面会交流についてだが、アンケート結果で、母子家庭では、「相手とかかわりあいたくないから」が一番多い回答結果になっているが、現在話題になっている問題である。家庭裁判所に面会交流を求めて調停を申し立てられる件数がすごく増えている。家庭裁判所は、基本的には面会交流が認められるべきであるという立場に立っていて、お母さん側の代理人としてみた時に確かに父と子の面会交流の重要性はわかりながらも、どうかなと思うようなケースや、面会交流を実際に認めているケースでも、もっともっと認めましょうというような形になっている。そのこと自体が悪いとは思っていないが、それに伴って、面会交流を行う場所の不足と夫婦間でDVがあつて面会場所には連れていくことが出来ない、その補助者もないというような場合にどのようにさせるかが問題になっている。

有料の遊べる場所を利用できる家庭はいいが、やはり高いので、面会交流に使えて、特に中でお子さんが遊べてお父さんと過ごせる場所、お母さんの側からは、子どもを連れだされても困るので、入り口の辺で待っているとかできるような場所があるとよい。アンケートの結果にもあるが、母子家庭で、お父さんと合わせることに苦労していることが多いように思うのでお話ししている。

面会交流は、家庭裁判所に申し立てられて調停がまとまらない場合、裁判所は審判で判断をするので、そこで合わせるべきである、合わせなさいとなった時に実際合わせるのに苦労している方がすごく多くいる。面会交流の援助をする機関はあるが、経済的に難しい。例えば、最初の相談で1万円払い、1年間ごとに1万円、最長1時間半で1万5千円というようになり金額がかかるので、そのような機関を使いたいが、使えないという悩みは非常に多いと思う。そのあたりを解消できるといいと考えている。

(事務局)：ヒアリングで地域子育て支援拠点を面会交流の場として使われている事を知った。

本間委員：お子さんの年齢に応じて利用できるようなところもなかなかなかったりしている。

今後、裁判所の姿勢なども考えると、これまで以上に経済的に苦しい中で、面会交流ができる場所、そのための支援が必要になってくるように思う。

高橋委員：母子生活支援施設は、ひとり親世帯全体からみれば母子世帯の一部の方しか見えない。2pでは、生活面で重点的な支援が必要な母子との記載があるが、入所者の8割が緊急避難の方々であり、積極的な支援というよりは、集中的な支援という表現の方がしっくりくる。9pの表は母子生活支援施設での支援にもそのまま当てはまると思う。短期利用の方は課題解決に関する情報を提供することで、当事者の方が主体的に問題を解決していく、自分で制度を使える人たちには、精神的な部分を支えること、また将来展望に関しても働きかけていくことで解決していく。問題が起きている場合は、集中的に、重点的に解決していく、このことは、ひとり親だからと

いう事ではなくて、地域で発生している問題でも同様だと考えている。ひとり親だからと限定していくとすると、地域の中で展開するときには、子育てに困難を抱えている方は、必ずしもひとり親ではない。離婚という事態が起きるときに、集中的にする支援だが、私のところでは、DVという言葉が入っていることが多い。そうでない方々は、不安や悩みを持ちながら生活されているときに、情報を的確に提供することと、そうだねと言っとうなずいてあげられるような、当事者の自己決定を尊重する関わりが大事だと思っている。何々費というようなお金の話が出てくるが、こればかりはどうにもならない。仕事をされているお母さんだと、子どもが小さいうちは、熱を出したり、体調を崩したりしてしまい休みがちになり、職場にいつらなくなってしまうことがある。就業するときには十分理解していただいていたはずだと思っけていても現場に行くとも異なることもあるので、職場の開拓、開発にもっと力を入れてほしい。国レベルで動いていただくとインパクトがあるかもしれない。それが出来ないとなかなか解決は難しいのではないかな。

離婚の問題では、面会交流について、母は子どもを会わせたくない、相手と会いたくないと思っている方もいる。子どもの権利だと思つくと子どもを会わせるべきだというのはその通りだと思うが、私たちの施設には、面前DVのお子さんが来ていると考えると、児童虐待の場にいたお子さんが、そのような課題がある人のところへ行くこと自体がいいのだろうか、というところのリスクマネジメント、会つた後の子どものフォローなど、どうやって懇切丁寧にフォローしていくのか、子どもの精神面への影響など誰が見ていくのか気になるところである。

支援機関を使って面会交流をしていただくのは、お金がかかるのはその通りだが、たいていは相手方が出してくれている。とにかく立ち合いの下でやってもらいたいという希望は、子どもが大きくなってからもある。小学校3年生までは立ち合いができることになっているが、それを超えともう立ち合いはできなくなる。そうなるとお母様は不安を感じてくる。お母様の希望通りにいかどうかはわからないが、安全に交流ができる場所の数が増えていかないとなかなか難しい。

情報提供が重要である。DVが絡んでくると、場所を特定される危険性のない場所で会う必要も出てくる。そういう意味ではまだまだ数が足りない。横浜は支援や施設はたくさんあるといわれるが、行き止まりになっているようなことも多い。

離婚調停の時に、面会交流の件が解決しないと、合意が取れずに離婚が長引く要因になることがある。養育費は相手の収入などによる標準の数字は出ているので、本当は離婚する前に夫婦で話し合つるとよいと思うが、そのような情報を発信し当事者に届かないと子どもの権利は守られない。

本間委員：裁判所が出している養育費の算定表は、インターネットやスマホで見ることが出来るので、皆さんかなり知つてきているなという印象はある。実際にそれが受け取れるかは別な話になると思うが。

(事務局)：そういった情報を入手する以前の話として、まず婚姻関係を解消したい、色々めんどくさい事をするよりは、まずDVなどの色々な状況を解消したいという場合には、子どものために養育費のこととか考えた上でというより、まず離婚したいという事が多いという事を聞いている。他都市や外国の例だと、離婚前から夫婦一緒に離婚

しても子供の親だという合意などを行っているところもあるが、なかなか成立しやすい家庭ばかりではない。親権や養育費の部分は、これまで公的な部門は関わりが難しかった。一般的には、離婚届を取りに行き、出すところから最初のかかわりが始まっていた。この時点で、こども家庭支援課のサポートや就労支援、保育園のことなどの相談が始まっている。行政としては、離婚前からの情報提供やサポートはこれまでは難しかったという事はある。最初の窓口がこども家庭支援課だと、今後の手当てというところから始まることも多いが、もしも区の現場の方で、ひとり親さんと接する中でお気づきの点などあればお願いしたい。

柴山委員： 昨年の11月から、瀬谷区にも児童家庭支援センターが設置された。地域で子育て支援を担っているNPOさんに担っていただいている。その中で、ひとり親家庭児童の生活・学習支援モデル事業を行っている。児童家庭支援センターの中で事業を実施していただいているので、非常に重なる部分が多く、預かりのニーズも高いので、非常に良い事業展開が出来ていると考えている。資料1の9pの層2ところに、伴走型の支援とあり、必要なことだと思う。実際これをどこが担うかなど今後の議論になるところかと思う。その取り組みの一つとしては、児童家庭支援センターが担うというのも例かなとは思っているが、そこまで広げると、本来の業務が色々あるかもしれないが、10pに書いてあるように、親の自己肯定感、子どもの自己肯定感という事であれば、児童家庭支援センターには、臨床心理士さんを置いていたかと思うので、こういったところの支援もできたりする。横浜市は、色々な施策とか事業とかを展開していて、それらをうまく組み合わせることによって一つの解決になることもあるかとは思っているので、そのような視点をもって計画され話し合っていければと考えている。

湯澤委員： DVの視点がひとり親の促進計画からはどこの自治体でもすっぱり抜けてしまっている。男女共同参画だったり、女性相談や婦人相談の方の職務分掌だからという事もあるのかもしれないが、やはり、DV被害をサポートする視点をもって対応していかなければならないというところが、もう少し強調されてもいいのかという気がする。10pのところでも、総合支援機能で相談機能の充実で、ひとり親目線の冊子とか、戸籍窓口との連携とかあるが、それに加えて女性相談などとの連携とか、DV被害をサポートしていく視点を持った相談機能の充実とか、そういうことがないと個人の感覚であんなことを言っているとかで終わってしまうので、研修の中でも必要かなと感じた。

白藤委員： 今後重視する視点の中で、総合支援機能の中に、当事者同士の交流のような機能があってもよい。近くに参加する場があるという事が、参加につながると思っている。現在、3自治体からの就労支援セミナーを運営しているが、施策の切れ目になる18歳以降や急に落ち込んでしまうような状況が、若い方が見通すことが出来ない。先輩のシングルマザーから話を聞くことによって、そういう風に働き方を変えていけるんだとか、そこで一旦収入が途切れてしまうとか落ち込んでしまうときに備えてキャリアアップを図っていかなければならないんだな、とか他の方から聞いて腑に落ちることがあるので、ぜひそのような交流機能を入れてほしい。

湯澤委員： 東京で、高等技能訓練促進事業で、看護師資格を取得する場合に、実際に取得した

方々の報告を聞けるという講座がある。何人もの方の話があって、病院の看護師さんになった方もいらっしゃれば、保育所の看護師として勤めて勤務時間がいいというようなお話をされる方もいる、赤ちゃんを連れてきているようなお母さまからいろいろな方が参加していて、終わった後には駆け寄って行って話を聞くような状態で、先輩の方々の話を聞くことは重要なんだなという事を改めて思った。実績一覧でも残念なことに技能促進費の受給者数が減っていたりして、個々の事業を活用できないのかなと思う。工夫を検討していただきたい。

(事務局)：制度の充実と合わせて、それをどうやって必要な人に自分事としてとらえていただけるように周知していくか検討していきたいと思う。

高橋委員：対象となる資格は自治体が決めているのか。

(事務局)：国が例示を出していて、国は資格を増やしている。横浜は比較的最初の資格を挙げている。

高橋委員：資格の取りやすさは意識されていると思う。子育ての時間もあるので、横浜でも広く適用されるとよいと思う。

道下委員：給付型の奨学金についてお話ししたい。日本学生支援機構の奨学金に給付型が導入された。また、ローソンでもひとり親向けの給付金の制度が始まった。昨年9月から話し合いが始まり、4月に決まる予定だったが、6月にやっと決まった。全国で400名、横浜は11名募集、参加できる。きょう午前中書類審査など行って、11名のところ46名の応募があった。中学3年から高校1、2、3で11名である。年間3万円、年間36万円が支給されるが、中学3年生であれば、まじめに学校に通えば4年間もらえる。親子で面談をするが、成績には関係がなく、まじめに学校に行って夢をもって何かをしたいという子どもたちに支給される。比較的低所得者から選ぶ予定。中学3年生が3名、高校1年、2年が3名、高校3年生が2名である。埼玉が17名、川崎が5名、神奈川県が8名で横浜はいい方だと思う。選ぶのは大変だが、学校の出席日数の書類もいただいて、今月末に親子で面談をして決定する。全母子連が東京にあるが、そちらに書類を送り最終的に全国400名が決まる。産経新聞にも掲載されている。ローソンと三菱商事が提携している。三菱商事は、44年前から夏休みに東京の母子寡婦でお母さんとこどもの自然教室を新潟で実施している。横浜もお願いして7~8年前から参加することになった。今年は私もどのようなものか見てきた。今、東京、神奈川、千葉、埼玉の4県を対象に実施している。みんな喜んでいて、1回限りである。民宿に泊まって楽しかった。横浜、神奈川、埼玉が同じ民宿に泊まったが、このような社会貢献があると助かる。

養育費であるが、会員の中で養育費を少しもらってもあとから子どもに頼ってこられると困るのももらっていないという方がいる。面会なんかとんでもないという事もある。

本間委員：面会交流の件は、前は民法にははっきり書いていなかったが、後から明文化された。

やはり会わせる場所も大変だし、父親に会わせ方がいいたろうと思っていても自分が連れて行って相手に会うのは嫌だというようなケースもあるので、そういうものも含めて、支援の制度や場所があるとよい。アンケートの結果の結果を見ると利用したいかという点では積極的ではないが、実際に制度とか場所とかがあって、

その利用が増えていく過程で利用したいという人が増えていくのかと思う。

(事務局)：場所もさることながら、安全な環境や利用しやすさ、お金のことなども関係してくるという事だと感じた。

西川委員：3pの課題のところだが、(6)子どもへのサポート「・・・もっと早い時期からの支援が必要との声が多く小学生からの支援が求められている。」とあるが、保育園の側からとしては、乳幼児からの支援をお願いしたい。それは、10pの貧困の連鎖の解消があげられているが、貧困の連鎖の解消は、子どもへの支援が大切であるからである。アメリカの経済学者のヘックマンが発表した子どもの育ちと大人になってからの関係の研究では、40歳以上の大人の年収や社会的な立場などの生活水準は、子どもの頃の就学以前の教育とか保育とか養育とかと最も比例するという研究結果が出ている。高橋委員が発言したが、子どもが病気になったりしても、預けられないような実情があったり、ちょっとした残業をしても保育の延長料金がかかるなど負担が大きい。就学前である子どもへの支援というと親子でセットのようなどころはあるが、このようなところへの支援を行っていただくと、子どもに戻ってくるので、貧困の連鎖の対策にはつながっていくと考えている。

(事務局)：今、保育、養護への支援を進めているところですが、よりひとり親世帯が利用しやすいようにすることも含めた乳幼児への支援という事ですね。

道下委員：横浜では中学校の給食を考えていないのか。他都市では結構あると聞いている。

(事務局)：横浜市では「ハマ弁」という形で教育委員会では選べるとしているが、当日の申し込みが出来ない、料金がやや高い、定期的に利用しにくい、友達の前では広げにくいなどの事情があり、広がっていない。一方で、旧来的な給食は財政的に難しいという事を前提に、今後のことを検討しているところである。

道下委員：障害児を持った母親から相談を受けたが、2年に一度診断書を出さなければならないが、診断書には、1万円ほどの費用が掛かる。安くできような何か良い方法はないものか。

(事務局)：状況ははっきりとはわからないが、特別児童扶養手当を受けている障害児のいる世帯では、障害の様子を確認するために診断書を出すような制度になっている。2年に1回というのは、法定である。

今回は費用が掛かると手続きがしにくくなるというご意見をいただいた。

湯澤委員：質問であるが、母子寡婦福祉貸付金が100件以上減っているのはどのような理由があるのか。

(事務局)：平成15、16年ぐらいをピークに毎年減っている。内容としては、お子さんの修学資金や就学仕度資金が90%以上である。生活保護の仕組みが一部変わり高等学校の授業料が無償になったことや、貸付資金なので返済のきちんとした目途をしっかりとご相談をしながらやっていることもあり敷居が高くなっている面もあるのかもしれない。しかし、所得での制限がある資金ではないので、必要な時には、どんなひとり親さんでもお子さんの就学のために授業料ですとか入学金を借りていただける資金となっている。

精緻な分析はでき切れていないが、無利子であるが、あくまでも貸付金で返さなければいけない資金なので、他の形で対応される方が増えてきているという事もある。

るかなと考えている。個別にご相談をしながら貸し付けをさせていただいている。全国的に減っている傾向である。

色々な事情で返済の滞る方はいる。その場合は、連帯保証人とか返済人の名義人を変更するとかして、追いかけている。

白藤委員：重点施策のところ、生活設計支援とあるが、実施しているセミナーの中でも大変人気のあるテーマである。私のところでは今は考え方をお伝えするセミナーとなっているが、個別相談などの可能性を検討していただけたらありがたい。

(事務局)：長時間本当にありがとうございました。生活の本当に基盤になる住まいの話から、就業、相互支援、子育てとか、生活をどう支えるとか、色々な背景を持つ方々のお話など幅広くご意見をいただきましてありがとうございました。

早期支援と中長期支援の視点がわかるように記載できないか、DVの対策は同じ部署で担当していますので、DVを背景にもつ離別も多いという中での視点についてもご指摘をいただきましたので、いただきましたご意見を踏まえてブラッシュアップしていきたいと思います。

この場でなくとも、お気づきの点がありましたら、メール、電話などでご連絡ください。

ありがとうございました。

配布資料	資料1 次期計画の方向性と考え方について 資料2 平成25～28年度実績一覧 資料3 アンケート調査実施報告書 資料4 関係者ヒアリング実施報告書 資料5 次期計画の骨子案について 別添1 すくすくサポートプロジェクト（厚生労働省）
特記事項	今回は、11月1日（水）に開催予定。

横浜市ひとり親家庭自立支援計画

(平成30年度～平成34年度)

素案 (案)

横浜市

目次

I	計画策定の趣旨	4
1	計画の位置づけ	4
2	計画の期間	4
3	策定の経緯及び第3期計画における主な取組	5
4	基本方針	7
II	ひとり親家庭の現状と課題	8
1	ひとり親家庭の現状	8
(1)	ひとり親家庭の数	8
(2)	ひとり親家庭の世帯状況について	8
(3)	ひとり親家庭の親について	8
(4)	ひとり親家庭の子どもについて	9
(5)	ひとり親家庭になったときに困ったこと	9
(6)	福祉制度の認知・利用希望	10
2	ひとり親家庭の課題状況	12
(1)	子育てや生活支援について	12
(2)	就業の支援について	12
(3)	経済的支援について	13
(4)	養育費確保の支援について	14
(5)	相談・情報提供について	14
(6)	子どもへのサポートについて	15
3	社会的背景	17
(1)	子どもの貧困の社会問題化	17
(2)	権利擁護の高まり	17
(3)	父子家庭ならではの支援ニーズの増加・対応の必要性	17
(4)	子どもの教育に対する支援の必要性の高まり～給付型奨学金	18
III	支援の基本的姿勢	19
1	支援の基本的姿勢	19
(1)	3つの視点	19

(2) 5つの重点	19
① 子育てや生活支援から就業支援までの総合的支援	19
② ニーズに応じた適切な相談支援	20
③ 積極的な情報提供	20
④ 当事者同士の交流と支援者の連携	20
⑤ 子どもへの支援	20
IV 支援の具体的計画	21
(1) 子育てや生活支援	21
(2) 就業の支援	24
(3) 経済的な支援	26
(4) 養育費確保の支援	28
(5) 相談機能や情報提供の充実	29
(6) 子ども自身へのサポート	31
計画の進ちょく状況の把握	33
V 参考資料	34
平成25～29年度計画「支援の具体的計画」実績一覧と振り返り	35
第3期計画の振り返り	39
横浜市ひとり親家庭アンケート調査結果の概要	41
ヒアリング調査結果の概要	45
横浜市ひとり親家庭自立支援計画策定連絡会	48

Ⅰ 計画策定の趣旨

1 計画の位置づけ

様々な困難に直面している母子家庭等に対し、きめ細かな福祉サービスの展開と自立に向けた支援をするため、平成14年11月「母子及び寡婦福祉法」が一部改正され、その第12条に都道府県等の自立促進計画について規定が設けられました。また、平成15年3月には、都道府県等が策定する自立促進計画の指針となるべき事項を定めた「母子家庭及び寡婦の生活の安定と向上のための措置に関する基本的な方針」が厚生労働省より示されました。

横浜市では、母子家庭等の施策が総合的かつ計画的に展開するよう、平成15年度、平成20年度及び平成25年度にそれぞれ5か年間の「自立支援計画」を策定してきました。

次期計画にあたる第4期計画は、第3期（平成25年度から平成29年度）の5か年計画が終了するにあたり、

- ① ひとり親家庭アンケート調査及び支援者・当事者団体へのヒアリングの実施
- ② 有識者や関係者で構成する「ひとり親家庭自立支援計画策定連絡会」での検討
- ③ 児童福祉審議会及び子ども・子育て会議での意見聴取
- ④ 市民意見募集

を行い、策定していきます。

2 計画の期間

本計画は、平成30年度から平成34年度までの5か年とします。

なお、母子及び父子並びに寡婦福祉法第11条に基づき厚生労働大臣が定めた「母子家庭等及び寡婦の生活の安定と向上のための措置に関する基本的な方針」の対象期間は、平成25年3月に一部改正されたことにより、平成27年度から平成31年度の5年間となっています。

横浜市のひとり親家庭に向けた施策を切れ目なく総合的に展開していくため、本計画は平成30年度からの5か年として策定していきますが、国の動向や計画策定後の情勢変化等に対応するため、必要に応じて見直しを行うものとします。

3 策定の経緯及び第3期計画における主な取組

平成14年3月	母子家庭等自立支援対策大綱	児童扶養手当中心の支援から、就業・自立に向けた総合的な支援へ
11月	母子及び寡婦福祉法改正 *都道府県等の自立促進計画策定について規定が設けられる	
平成15年4月	国の基本方針（対象期間：平成15年度～平成19年度） *母子家庭施策の総合的な展開 *自立支援計画の基本となるべき事項	
平成16年3月	横浜市母子家庭等自立支援計画（平成15年度～平成19年度）	
平成20年4月	国の基本方針（対象期間：平成20年度～平成24年度） *①子育て・生活支援策 ②就業支援策 ③養育費の確保策 ④経済的支援策 の総合的支援を実施 *就業支援及び養育費確保策（相談機能）を強化	
平成21年3月	横浜市母子家庭等自立支援計画（平成20年度～平成24年度）	
平成24年4月	民法等の改正法施行 *離婚の際の親子の面会交流、子の監護に要する費用の分担の明確化	
平成25年3月	母子家庭の母及び父子家庭の父の就業の支援に関する特別措置法施行 *雇用機会の拡大、母子・父子福祉団体等の受注機会の増大等	
平成26年1月	子どもの貧困対策の推進に関する法律施行	子どもの貧困が問題化
平成26年2月	横浜市ひとり親家庭自立支援計画（平成20年度～平成25年度）	
平成26年8月	子供の貧困対策に関する大綱閣議決定	父子への支援拡充
平成26年10月	母子及び寡婦福祉法改正→母子及び父子並びに寡婦福祉法へ *支援体制の充実、支援施策・周知の強化、父子家庭への支援の拡大	
平成27年10月	国の基本方針（対象期間：平成27年度～平成31年度） *ひとり親家庭への支援施策の在り方に関する専門委員会で示された課題、法改正事項、子どもの貧困対策に関する状況等を踏まえ以下の新たな事項を追加。 ①相談支援体制の整備（ワンストップ相談窓口の設置推進、母子・父子自立支援員等の研修の実施） ②学習支援の推進 ③親の学び直しの支援 ④在宅就業の推進 ⑤養育費の確保及び面会交流の支援の強化 ⑥広報啓発の実施等支援体制の充実、支援施策・周知の強化、父子家庭への支援の拡大	

● 現行計画（25～29年度）期間内に実施した主な取組内容

年度	計画における分野	取組内容
25	就業の支援	自立支援教育訓練給付金・高等職業訓練促進給付金：新たに父子家庭を対象
26	経済的支援	母子父子寡婦福祉資金貸付事業：新たに父子家庭を対象
		児童扶養手当：公的年金給付等との併給制限の見直し
	相談・情報提供	母子家庭等就業・自立支援センター：「ひとり親サポートよこはま」という愛称を設定。併せて、「ひとり親サポートよこはま」の連絡先を記載したカードを作成し、区役所窓口等で配布を開始。 離婚に関する相談の新規実施
		区職員向け研修：養育費に関する研修を改編し、「離婚前後の法律問題と養育費に関する研修」を実施（27年度以降は年3回）
27	就業の支援	ジョブスポット：全18区に設置（25年度から順次設置）
	経済的支援	寡婦（夫）控除のみなし適用：新規実施
	養育費確保の支援	法律相談：実施回数の増（年36回→年42回）
養育費セミナー：実施回数の増（年2回→年3回）		
28	子育てや生活支援	日常生活支援事業：未就学児を養育している家庭について、就業を理由とする場合の定期的な利用を開始
	就業の支援	自立支援教育訓練給付金：支給割合の拡充（2割→6割）
		高等職業訓練促進給付金：支給期間の拡充（2年→3年）
		高等学校卒業程度認定試験合格支援事業：新規実施
		高等職業訓練促進資金貸付事業：新規実施
	経済的支援	児童扶養手当：第2子以降の加算額の増額
	養育費確保の支援	養育費セミナー：実施回数の増（年3回→年4回）
相談・情報提供	ひとり親サポートよこはま：ひとり親サロン（月1回、講習会等とおしたひとり親同士の交流の場）を新規実施	
29	就業の支援	自立支援教育訓練給付金：新たに雇用保険の教育訓練給付金対象者にも適用

※ひとり親サポートよこはま実施事業

※ひとり親サポートよこはま実施事業

4 基本方針

ひとり親家庭において親は、子育てと生計維持という役割を一人で担っています。

多くのご家庭では、保護者が両者の役割をしっかりと担い、多忙な中でも子どもは健やかに成長していきますが、すべてをひとりで担ういわゆるワンオペレーションの中で、日々の生活において様々な困難を抱えやすい状況にあります。

DV被害や障害を抱えているなど他の困難要因が重なると、安定した生活を維持していくことが難しい状況に陥りやすいといった課題状況もあります。

そのため、ひとり親家庭の安定した生活と自立に向けては、子育てや生活維持、就労など、その生活を総合的にとらえたきめ細かな支援が必要です。

そこで、本計画は、児童の健全な成長を確保するために、ひとり親家庭の自立を支援することにより、その世帯の生活の安定と向上を図ることを目的に策定することとします。

また、計画における事業・施策の実施にあたっては、支援を行う機関や団体等の連携を図りながら推進していきます。

■ 本計画における用語の定義

- ・母子家庭：母と20歳未満の児童がいる世帯（同居の親族がいる場合を含む）
- ・父子家庭：父と20歳未満の児童がいる世帯（同居の親族がいる場合を含む）
- ・寡婦：かつて母子家庭の母であって、子どもが成人し、現在も配偶者のない状態にある方
- ・ひとり親家庭・・・母子家庭・父子家庭・寡婦

※児童扶養手当は18歳の3月末までの児童を対象にしていますが、本計画においては「母子及び父子並びに寡婦福祉法」に従い20歳未満の児童を扶養する世帯を対象とします。

■ 引用している調査

- ①「横浜市ひとり親家庭アンケート調査（H29年度）」＜横浜市実施＞（以下、「本市調査」）
対象：父又は母と20歳未満の児童がいる世帯で、同居の親族がいる場合を含む
- ②「国勢調査（H27年）」＜総務省実施＞
対象：父又は母と20歳未満の児童のみの世帯
- ③「平成28年 国民生活基礎調査」＜厚生労働省実施＞

※ 特に注記のない統計数字及びグラフは本市調査によります。

II ひとり親家庭の現状と課題

アンケート調査の結果の説明については、グラフも掲載していきます。

1 ひとり親家庭の現状

(1) ひとり親家庭の数

本市のひとり親家庭の数は、平成27年の国勢調査によると26,391世帯で、内訳は母子家庭22,803世帯、父子家庭3,588世帯となっています。ただし、この世帯数は、ほかの家族等との同居も含めた数値です。

母親又は父親と20歳未満の児童からなる世帯の数は、19,724世帯で、内訳は母子家庭17,600世帯、父子家庭2,124世帯となっています。

ひとり親家庭になった理由は、全体では、離婚が73.9%、死別が15.4%、未婚が5.7%、母子世帯では、離婚が77%、死別が10.2%、未婚が7.5%、父子世帯では、離婚が64.5%、死別が31%、未婚が0.4%となっています。

(2) ひとり親家庭の世帯状況について

本市調査によると、年間の世帯総収入（児童扶養手当、養育費等を含む）の全体平均は431.7万円ですが、母子家庭の平均収入は360.6万円（前回調査331万円）、父子家庭の平均収入は642.6万円（前回調査571万円）となっています。

母子家庭・父子家庭ともに、収入は前回調査から増加していますが、母子家庭のみでは約4割が300万円未満となっています。

平成28年国民生活基礎調査によると、「児童のいる世帯」の平均所得額は707.8万円となっており、ひとり親家庭の収入が低いことがわかります。特に、稼働収入については、「児童のいる世帯」646.9万円に対して、本市の母子家庭は295.2万円、父子家庭は614.9万円となっていて、母子家庭が非常に低いことがわかります。

養育費について取り決めをしている世帯（「子によって違う」と回答した世帯を含む）は44.6%で、前回調査の43.6%から大きな変化はありません。

住居の状況は、「民間の賃貸住宅」が33.4%と最も多く、また、「市営・県営」や「公団」などの公営住宅は8.3%となっています。「自身の名義の持家」は28.5%、「自身以外の名義の持家」が23.8%となっています。

(3) ひとり親家庭の親について

ひとり親家庭の母又は父の平均年齢は、母親35.5歳、父親39.6歳となっています。

親の最終学歴は、「高校・高等専修学校卒」が母親32.5%、父親39.6%で、母親の場合は「高専、短大、専門学校卒」が35.6%で最も多いのに対し、父親は「大学、大学院卒」も36.3%で「高校・高等専修学校卒」に次いで多くなっています。

母子家庭の最終学歴と就業形態の関係については、「中学校卒」と「高校・高等専修学校卒」の就業者に占める「正社員・正規職員」の割合は32%、「パート・アルバイト」などの非正規雇用が61%であるのに対し、「大学、大学院卒」の「正社員・正規職員」は52%、「パート・アルバイト」などの非正規の雇用は38%となっていて、学歴と就業形態の関連がわかります。

ひとり親家庭になる前に仕事をしていた人は68.2%ですが、現在収入をとまなう仕事をしている人は全体で87.1%と、全体の約20%の人はひとり親家庭になった後に仕事を始めていることとなります。

また、ダブルワークなどの副業をしている人は6.8%ですが、母子では8.3%と1割弱の人が副業を行っている状況となっています。

健康状態については、「よくない」と「あまりよくない」を合わせると22.2%となっており、前回と比べ減少しています。

(4) ひとり親家庭の子どもについて

ひとり親家庭の子どもの人数は、「1人」が52.1%、「2人」が36.2%、「3人」が8.6%、「4人以上」は1.5%となっています。

また、母子家庭の子どもの数は平均1.58人で、父子家庭では1.62人となっています。

子どもの就学・就業状況は、母子家庭は「小学生」の子どもがいる世帯が35.7%で最も多いのに対し、父子家庭では「高校生、高等専修学校」が35.1%で最も多くなっており、母子家庭よりも父子家庭の子どものほうが子の年齢が高いことがわかります。

(5) ひとり親家庭になったときに困ったこと

ひとり親家庭になったときに困ったこととして、「生活費が不足している」が57.6%で、次いで「炊事洗濯等の日常の家事ができない」38.9%、「就職先が決まらない」13.9%となっています。

母子・父子家庭別にみると、母子家庭では「生活費が不足している」が最も多いのに対し、父子家庭では「炊事洗濯等の日常の家事ができない」が最も多くなっています。

また、アンケート調査の回答時点現在で困っていることについて、「生活費が不足している」については、39.6%と多くの方が挙げており、ひとり親となって時間が経過しても困っていることがわかります。

「炊事洗濯等の日常の家事ができない」については、母子家庭では、ひとり親になったときは33.3%、調査回答時点は19.6%、父子家庭では、ひとり親になったときは55.9%、調査回答時点では32.7%と減少はしていますが、依然として高い割合となっています。

(6) 福祉制度の認知・利用希望

ひとり親に関する制度の認知状況については、相談関係では「区役所福祉関連窓口」「児童相談所」、就業支援では「公共職業安定所（ハローワーク）」、すまい施設では「市営住宅」、経済的支援では「児童扶養手当」「生活保護」「ひとり親家庭等医療費助成」「就学援助」「バス・地下鉄等の特別乗車券交付」が7割以上の方に認知されています。

しかし、「横浜型児童家庭支援センター」「母子・父子家庭自立支援教育訓練給付金」「母子生活支援施設」「生活困窮者自立支援」など認知されている方が3割以下の制度もあります。

特に子育て・生活支援関係はどの制度も認知されている方は3割以下となっていて、多くの方に知られていない状況です。

また、今後利用したい制度については、母子家庭では、「母子・父子家庭自立支援教育訓練給付金」の30.2%や「ひとり親サポートよこはま」の27.5%といった就業支援、「市営住宅」の29.9%といった住宅支援への希望が高く、父子家庭では、「バス・地下鉄等の特別乗車券交付」の26.9%や「家庭生活支援員（ヘルパー）の派遣（日常生活支援事業）」の24.1%など、生活への支援の希望が高い状況となっています。

アンケートに寄せられた声から

アンケート調査の際、現在悩んでいることや困っていること、意見や要望などを自由に記入していただきました。

「児童扶養手当の期間について、子どもが18歳まででなく（子どもが巣立つまで）伸ばしてほしい」「母子家庭と父子家庭の支援の格差がありすぎる」といった、制度への意見や要望が多く寄せられました。

そのほか、「家賃が厳しい」「養育費が支払われず生活費が足りない」「就職活動を行いたくてもスーツ代など就活費用が厳しい」などの金銭面、「子どもの教育費がかさむのが大変」「子どもに本人が望む十分な教育を受けさせたいと考えているが、金銭的、時間的に限りがある」「将来を考え子どもの勉強をみてあげたいが丁寧にみる時間がない」など子どもの教育、教育費に関する悩みなども多く寄せられました。

なお、今回のアンケート調査は、父子家庭の抽出数を45%（前回10%）としたことにより、父子家庭からの回答数を多くいただけたことから、父子家庭の困難状況をより把握できました。また、母子家庭と父子家庭とでの傾向の違いもみられました。

■母子家庭では、収入や教育費等の生活費に関する困窮状態、ご自身の精神面やお子さんの障害などの不安、子どもが独立した後の老後への不安に関するご意見が多く寄せられました。

■父子家庭では、収入はあることからひとり親に関する支援がなかなか受けられないこと、女子がいる父子家庭での子の思春期の相談相手についての悩み、生活面の支援の必要性、子どもとのコミュニケーションが難しい、制度をほとんど知らない・情報がわからない、といったご意見が多く寄せられました。

2 ひとり親家庭の課題状況

ひとり親家庭において親は、ひとりで生計の維持と子育てを担わなければならないことから、安定した生活の維持を図るための就業等と子育てとのバランスを図ることに苦労することが多い状況となっています。

(1) 子育てや生活支援について

ひとり親家庭の末子の年齢は、幼児及び学齢児が多く、日々の生活における家事の援助や、保育や放課後児童施策等の子育て施策が必要となっています。

特に、父子家庭においては、育児等の協力を期待できる親族との同居は26.9%であり、ひとり親家庭になった時に困ったこととして「炊事洗濯等の日常の家事ができない」が55.9%と、母子家庭の33.3%に比べ割合が高く、家事支援に対するニーズが高い傾向にあります。

保育については、未就学児を抱える世帯の82.5%が保育園等を利用しており、就業支援のために、保育の確保は重要です。

ひとり親家庭の住まいの確保については、父子世帯では68.2%が自身や自身以外の持家であり一定程度確保されています。しかし、ひとり親家庭全体としては、自身や自身以外の持ち家が約5割、民間の賃貸住宅が約3割となっており、所得状況からも、公的住宅を含めた低額での住宅確保の支援が求められています。

また、DVへの対応や子育てに支援が必要な家庭に対しては、専門スタッフを配置している母子生活支援施設における支援とともに、施設退所後の継続したケアも必要となっています。

ひとり親家庭の方は、ひとり親であることをなかなか打ち明けることができなかつたり、多忙だつたり、自分が頑張らなければと孤軍奮闘されていたりと、望む・望まざるとに関わらず比較的ひとりで困難を抱えてしまう傾向にあるといわれています。

地域で支援に関わる方々に、ひとり親家庭の抱える子育てや日常生活の大変さを理解していただき、日々の暮らしの中での周囲からのささやかな気遣いや声掛け、ひとり親同士のつながりを育んでいくことにより、ひとり親とその子が、安心して地域で暮らすことが出来る環境が求められています。

(2) 就業の支援について

本市ひとり親家庭の就業率は高く、母子家庭が86.3%、父子家庭が89.4%となっています。

しかし、母子家庭の母の就業形態は「正社員・正規職員」が44.6%となっていますが、「パート・アルバイト」（34.6%）、「嘱託・契約社員・準社員・臨時職員」（9%）、「人材派遣会社の派遣社員」（5%）を合わせた非正規職員は約5割となっており、母子家庭の母で現在仕事をしている人の32.9%が、より良い就労に向けて転職をしたいと考えています。

このように、ひとり親家庭の多くは就労していますが、現在の収入、就業形態や雇用環境などとともに、子育てとの両立の難しさから、本人の希望とミスマッチが生じているため、希望する職業や就業形態が選択できる支援の仕組みが必要です。

特に、子育てと就労の両立を支援するためにも、親または子どもの健康状態や子どもの年齢に応じ、仕事に必要な知識や資格の取得支援から、生活条件に合う仕事のあっせんなど、ワークライフバランスも視野に入れ、個々の状況に合わせたきめ細かな、伴走型の支援が求められています。

（3）経済的支援について

ひとり親家庭の年間世帯総収入（児童扶養手当、養育費等を含む）の平均を見ると母子家庭は360.6万円、父子家庭は642.6万円となっています。また、平均稼働収入は、母子家庭は295.2万円、父子家庭は614.9万円となっています。

学歴別の平均稼働収入は、母子家庭の「中学校卒」181万円、「高校・高等専修学校卒」246万円、「大学、大学院卒」420万円、父子家庭では「中学校卒」425万円、「高校・高等専修学校卒」510万円、「大学、大学院卒」767万円となっており、母子家庭・父子家庭ともに、学歴と収入は比例しています。

母子家庭の就業形態別の平均稼働収入は、「正社員・正規職員」412万円、「パート・アルバイト」157万円、「嘱託・契約社員・準社員・臨時職員」255万円、「派遣社員」224万円となっています。

母子家庭・父子家庭ともに、ひとり親家庭になった時から現在に至るまで引き続き、生活費が不足していると感じている方が多いことから、経済的支援はひとり親家庭の生活に直接影響を与えています。

児童扶養手当等の経済的支援策は国の制度において行われていますが、国の制度を着実に実施するとともに、就労や稼働収入の増加など、次のステップにつなげていく支援も求められています。

(4) 養育費確保の支援について

離婚等によりひとり親家庭となった子どもへ支払われるべき養育費については、48.5%と半数近くの家帯で取り決めをしていません。

養育費の取り決め率が低い要因としては、「相手に支払う意志や能力がないと思った」、「相手と関わりたくない」「相手から身体的・精神的暴力を受けていた」といった理由から、養育費の確保に消極的になっていることがうかがえます。

国においては、平成19年度から養育費相談支援センターを開設し、母子家庭等就業・自立支援センターへの困難事例等の相談支援や、平成24年の民法の一部改正に伴う養育費や面会交流の取り決めの普及・啓発の取組がすすんでいます。

本市においても委託事業として実施している、母子家庭等就業・自立支援センターにおける相談機能や、啓発の取組の強化が必要となっています。

(5) 相談・情報提供について

ひとり親家庭で、相談できる相手の有無については「相手がいる」と回答したのが母子家庭は74.9%だったのに対し、父子家庭は49.8%となっています。また、「相談相手が欲しい」と回答した母子家庭は12.6%だったのに対し、父子家庭は20.4%と父子家庭の方が高くなっています。

ひとり親家庭の相談先のひとつとして、当事者同士のつながりでひとり親家庭ならではの悩みを共有し、不安を解消していくことも有効です。しかし、当事者団体の存在があまり知られていなかったり、父子においては当事者同士のつながりそのものが稀であるといった課題もあり、今後支援を充実させていく必要があります。

また、相談支援の場面では、DVや児童虐待の課題がある場合もあり、専門的な支援や、様々な課題状況をふまえた、総合的な相談支援をしていくことも求められています。

現在、ひとり親家庭になられる方に対し、相談窓口や支援制度等を紹介した「ひとり親家庭のしおり」を、区役所の戸籍課の窓口などで配付しているほか、ひとり親の相談窓口の案内カードを設置して周知していますが、更なる充実につとめる必要があるほか、相談や制度利用について、担当が複数の課に渡る場合もあり、わかりやすい案内や関係機関の連携強化が求められています。

情報提供については、本市の調査によると、「ひとり親家庭の支援制度を利用したかったが利用できなかった」と回答した理由として、ほとんどの制度において「制度があることを知らなかったから」が多く挙げられています。また、父子家庭への情報提供についても、制度が拡大され

母子家庭だけでなく父子家庭も利用対象となっている制度がある中で、周知や利用相談等に課題があります。

制度の周知を図るためには、ひとり親家庭に対して、紙媒体やウェブサイトなど様々な手法により、わかりやすく、身近で利用しやすい情報提供を行う必要があります。

(6) 子どもへのサポートについて

母子・父子を問わず、親との離死別は、子どもの生活を大きく変化させるものであり、そのことが子どもの精神面に与える影響や進学悩みなど、子どもが成長していく過程で様々な課題が生じることがあります。

親が子育てにあてられる時間がなかなか取れず、親との関わりが少なかったり、DV や児童虐待等により心のケアが必要だったりする場合があります。

また、ヒアリング調査からは、ひとり親の子どもたちは、親に無理をさせてはいけないと、比較的早く人生をあきらめてしまうこともある、という様子もうかがえました。

どんな状況にあろうとも子どもが健やかに成長できるよう、子どもの視点に立った、子ども自身への支援の充実が必要です。

そのため、子ども自身からの相談に応えられる体制の整備や、将来的に自立した生活が送れるように学習の機会を提供すること、別居している親と会うための支援などの充実が求められています。

近年、子ども食堂の取組の機運が高まり、学習支援や多世代交流の機能を併せ持つような場も出てきています。地域であたたく子どもたちを見守る取組の輪が広がるよう、支援をすすめていく必要があります。



ドメスティックバイオレンス（DV）とひとり親

母子生活支援施設入所者の多くがDVを理由としていたり、本市の離婚相談でも、離婚に至る原因の多くに相手からの暴力行為があったりするなど、ひとり親に至る背景のひとつに、DVの影響が深刻な状況があります。

暴力にさらされたことにより、親が恐怖心や心理的ダメージを受け、自立に向けた一歩をなかなか踏み出せなかったり、逃げるように出てきたため生活の基盤づくりに時間がかかってしまったりするなど、多くの課題状況があります。

また、親だけでなく、子どもも、暴力を受けたり、親が暴力を受けているのを目にすることで、心身に影響を及ぼし、自己肯定感が低かったり対人関係がうまく築けなかったりするほか、逆に暴力的にふるまう暴力の連鎖など、深刻な影響を及ぼしています。

ひとり親とその子どもの支援へ向けて、DV対策は重要な課題であり、関係機関の連携による取組強化につとめるほか、早い段階からの啓発や人権教育など防止につとめていく必要があります。

3 社会的背景

(1) 子どもの貧困の社会問題化

平成28年国民生活基礎調査の結果では、子どもの貧困率は13.9%と3年前の前回調査の16.3%から低下し、数値的にはやや改善に向かっていますが、ひとり親家庭の貧困率は5割を超え、依然とひとり親のおかれている厳しい状況があります。

子どもの貧困対策に関する大綱が平成26年に閣議決定され、子どもの貧困対策は国家的な課題として、特にその多くを占めるひとり親家庭の自立支援の取組の推進が重要となっており、「すくすくサポート・プロジェクト」として総合的な支援の取組が提唱されています。

■ すくすくサポート・プロジェクト（H28 厚生労働省）

<ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト>

・就業による自立に向けた支援を基本にしつつ、子育て・生活支援、学習支援などの総合的な取組を充実

・ひとり親家庭が孤立せず支援につながる仕組みを整えつつ、生活、学び、仕事、住まいを支援するとともに、ひとり親家庭を社会全体で応援する仕組みを構築

【主な内容】◇自治体の窓口のワンストップ化の推進（相談支援体制の整備）

◇子どもの居場所づくりや学習支援の充実

◇親の資格取得の支援の充実

◇児童扶養手当の機能の充実 など

(2) 権利擁護の高まり

平成24年の民法の改正により、協議離婚の際に父母が協議で定める事項の具体例として「親子の面会交流」「養育費の分担」が明示され、協議においては子どもの利益を最優先に考慮しなければならないことが明記される一方、面会交流における死亡事件などをはじめとした、さまざまな課題も表出しています。

子どもにとって望ましい養育費の確保や面会交流のあり方が、課題となっています。

(3) 父子家庭ならではの支援ニーズの増加・対応の必要性

平成26年度の母子及び父子並びに寡婦福祉法改正により、父子家庭も支援の対象として明確に位置づけられましたが、父子家庭は母子家庭に比べ比較的収入はあることから、ひとり親の支援事業になかなか該当しない、日常生活支援の必要性、孤立感など、母子家庭とは異なるニーズがあり、対応が求められています。

(4) 子どもの教育に対する支援の必要性の高まり～給付型奨学金

世帯所得に占める教育費の割合が増大しており、奨学金の貸与を受けても返済が滞るなど、教育費の確保はひとり親にとっても大きな課題となっています。

日本学生支援機構の奨学金に給付型が導入されたり、企業が新たにひとり親向けの給付型奨学金を募集するなど、民間資金の給付型奨学金も増えてきており、多様な制度の情報が必要とする人に的確に伝わるとともに、子どもにとって進学のマチベーションにつながるよう、支援につなげていくことが求められています。



Ⅲ 支援の基本的姿勢

1 支援の基本的姿勢

ひとり親家庭の自立した生活のためには、親が安定した仕事に就き、家庭の生計維持ができ、子どもが心身ともに健やかに成長することが望まれますが、ひとり親家庭の背景として、DVや児童虐待の問題、親の疾病や障害、子どもの年齢や疾病、障害など、必ずしも安定した生活が維持できる家庭ばかりではない状況となっています。

母子家庭や父子家庭それぞれに特有の課題やひとり親ならではの課題への対応だけでなく、生活を支える様々な子育て支援の施策の充実や、地域における子育て支援の推進などもあわせ、総合的な支援が必要であり、各種窓口や関係機関、支援者が相互に連携しながら支援にあたります。

また、子どもの貧困の連鎖を防ぎ、ひとり親家庭の子どもたちがその置かれている環境にかかわらず健やかに成長するよう、子ども自身への支援について取り組みます。

(1) 3つの視点

次の3つの視点を、基本的な方針として位置付けます。

① 自立を支援する視点

貧困の連鎖の解消に向けた、伴走型の自立支援（親の自己肯定感を高める）

② 子どもの視点

子どもに届く支援、子どもの視点に立った支援（子どもの自己肯定感を高める）

③ 地域支援の視点

地域展開の取組の推進（ピア・サポートや、地域のつながりづくりにより孤立を防ぐ）

(2) 5つの重点

推進にあたっては、次の5つのテーマを重点課題として取り組んでいきます。

① 子育てや生活支援から就業支援までの総合的支援

従来の計画でも進めてきた生活費の確保や資格取得、職業紹介等の就業支援だけでなく、子育てや心身の健康、家事などの生活支援から就業支援までの総合的支援を充実させます。

母子家庭の困窮状況の課題については、女性の就労や自立における課題状況と重なる部分も多く、市の男女共同参画の部門と連携を密にし、総合的に取り組んでいきます。

② ニーズに応じた適切な相談支援

様々な課題を抱えた家族の個々のニーズを踏まえ、一般の子育て等の施策とひとり親家庭への施策を組み合わせることなどにより、適切な相談や情報提供体制を充実させます。

③ 積極的な情報提供

支援制度が知られていないため利用に至らない現状があり、わかりやすく利用しやすい制度案内につとめ、積極的な情報提供に取り組めます。

④ 当事者同士の交流と支援者の連携

当事者同士の交流や仲間づくりに取り組むと共に、支援機関・団体等が相互に連携するとともに、ひとり親家庭が孤立せず地域の中で温かく見守られ、自立を目指していけるよう、支援します。

⑤ 子どもへの支援

親との離死別やDV・児童虐待等により受ける子どもの心理的影響に配慮しながら、貧困の連鎖を防ぐための学習支援や子どもの希望を尊重したうえでの親との面会交流支援など、子どもの視点に立った、子ども自身への支援を進めます。

IV 支援の具体的計画

(1) 子育てや生活支援

<日常の生活支援の充実と、地域力を活用した取組みの促進>

ひとり親家庭が安心して子育てと就業の両立ができるよう、多様な子育てや保育サービス、適切な住環境の提供など、子育てや生活面での支援を進め、生活の場の安定を図ります。

具体的には、日常生活への支援として、病気や就職活動時等で支援が必要な方に対しては、ヘルパーの派遣により一時的な家事・育児等のお手伝いをします。また、児童家庭支援センターにおいて、疾病・疲労等により一時的に児童の養育が困難になった場合の短期預かり（トワイライト・ショートステイ）や、相談支援を行います。

また、求職活動や就業に際して、保育所の優先的入所を実施し、安心して活動等が行えるようにします。病児や病後児の保育については、一般施策を引き続き充実させていきます。

住居の確保としては、安定した住環境で生活ができるよう、引き続き市営住宅の当選率の優遇や民間住宅への円滑な入居を支援するとともに、離職した方への住宅支援給付や、子育てりびいんにおける賃貸住宅への家賃補助等を行います。

また、新たな住宅のセーフティネット制度により、新たな住宅確保策に取り組みます。

生活面で重点的な支援が必要な母子家庭については、母子生活支援施設において、自立に向けた支援を行います。また、施設退所後も継続してフォローを行い、地域で自立した生活ができるように支援します。

多くのひとり親家庭は地域で生活しているため、暮らしている地域全体でひとり親家庭を見守ることができるよう、民生委員・児童委員や自治会町内会等の協力を得ながら、ひとり親家庭の課題を理解してもらうことを進めるとともに、地域子育て支援拠点等と連携してひとり親同士が交流する機会づくりを行うなど、日々の生活において寄り添い、良き隣人として、必要な時には支援をするなどの地域力を活用できる環境となるよう取組みを進めていきます。

1 日常生活への支援

● ヘルパーの派遣事業

ひとり親になった直後の急激な生活環境の変化、病気や就職活動などにより、一時的に家事・育児等にお困りの方に、日常生活のお手伝いをする日常生活支援事業をはじめとした、多様なヘルパーを派遣していきます。

日常生活支援事業	一時的に家事・育児等に困った時のひとり親の方が利用できません。
育児支援家庭訪問事業	区が育児不安等により関わっているご家庭に、必要に応じて派遣します。
養育支援家庭訪問事業	児童相談所が関わっているご家庭に、必要に応じて派遣します。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

● 子育て短期支援事業

保護者の疾病や疲労、夜間の急用、休日の不在等の理由により、一時的に児童の養育が困難になった場合、児童家庭支援センターで子どもを預かります。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

● 子育てサポートシステム

地域ぐるみでの子育て支援を目指し、子どもを預かって欲しい人と子どもを預かる人に会員登録していただき、条件の合う近隣の方との出会いをサポートしています。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

2 保育所への優先入所

未就学児のいる世帯が、安心して就労・求職活動等が行えるよう、保育所入所時の優先度をアップします。

(担当部署：区福祉保健センター及びこども青少年局保育・教育運営課)

3 住宅確保の支援

● 市営住宅入居時の優遇

市営住宅申込時の当選率を一般より優遇し、入居しやすくします。

(担当部署：建築局市営住宅課)

● 民間住宅あんしん入居

家賃等の支払い能力があるものの、連帯保証人がいないために民間賃貸住宅への入居が困難な方に対して、協力不動産店が住宅をあっせんし、協定保証会社が家賃等の債務保証を行います。

(担当部署：建築局住宅政策課)

● 子育てりびいん

小学校修了前の子どもがいる世帯が安心して入居できるよう、子育て環境に適した賃貸住宅を横浜市が認定し、家賃補助を行います。

(担当部署：建築局住宅政策課)

● 新たな住宅のセーフティネット

住宅確保が難しい要配慮者を対象に、民間賃貸住宅や空家を活用した住宅確保要配慮者向け住宅の登録制度や居住支援・経済的支援等により民間賃貸住宅への入居を円滑にする、新たな住宅のセーフティネットを創設します。

(担当部署：建築局住宅政策課)

4 母子生活支援施設 《対象：母子》

18歳未満の子どもを養育している母子家庭が、様々な事情から支援を必要としている場合に、安心して自立に向けた生活を営めるよう、子どもと一緒に入所できる母子生活支援施設を運営するとともに、その環境の改善を進めます。

また、母子生活支援施設利用者が退所後においても安定した生活を送ることができるよう、フォロー支援職員を配置し、退所後1年間、世帯訪問及び電話相談等のフォロー支援を行います。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

5 児童家庭支援センター

子育てに悩む地域の保護者の方や、子どもたちの悩みの解決に向け、専門的な相談や子育て短期事業、地域交流イベントなどによる支援を行います。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

6 子育て世代包括支援センター

区福祉保健センターこども家庭支援課と地域子育て支援拠点が連携し、地域の特性に応じた「妊娠期から子育て期（主に未就学児）にわたる切れ目のない支援」を提供していきます。

区福祉保健センターの「母子保健コーディネーター」による妊娠期からの相談機能の強化と、地域子育て支援拠点の「横浜子育てパートナー」をはじめとする様々な取り組みと連携・強化することで、子育て支援の充実をはかっていきます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課・子育て支援課)

7 地域力の推進の支援

ひとり親家庭が孤立せず暮らしやすい地域となるように、民生委員・児童委員の活動や地域子育て支援センターなどによる支援と共に、関係者にひとり親家庭の生活の困難さ等への理解を深める啓発に努め、地域でひとり親を支える機運を高めていきます。

また、ひとり親同士が地域で交流できるような仕組みづくりをすすめます。

● ひとり親サロンの地域展開

同じひとり親同士で交流し、悩みや不安を和らげ安心につながるよう開催している「ひとり親サロン」について、地域子育て支援拠点等と連携しながら展開することで、地域におけるひとり親のつながりづくりの一助になるようすすめていきます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

(2) 就業の支援

＜より安定した就業形態での雇用の促進＞

ひとり親に必要な就業の支援は多様であり、就職活動をこれから始める人から、雇用の不安定さの解消や収入アップのための転職やスキルアップを希望している人もいることから、それぞれの現状と目標に合わせたきめ細かな対応を行います。

就職に必要な技術や資格の取得、学歴確保のために実施している、様々な給付金などを引き続き実施するとともに、安定的な就業に結びつきやすい社会的ニーズに即した講習会の開催や、ひとり親の方が受講しやすい環境を整えます。

また、実践的な就職活動への支援が必要な方に対しては、就職活動の仕方から職業紹介まで、一人ひとりの状況に合わせた伴走型の就労支援を、母子家庭等就業・自立支援センターで行います。なお、母子家庭等就業・自立支援センターにおいては、ひとり親が働きやすい職場環境を備えた、企業の開拓・確保にも努めます。

また、求人情報の円滑な提供と効果的な指導を受けられるように、母子家庭に適した職業紹介を行うマザーズハローワークや、各区役所内に設置されたジョブスポットなどと、より身近な場所で迅速に求人情報を提供できるよう、連携を強化していきます。

8 母子家庭等自立支援給付金事業

● 自立支援教育訓練給付金

適職に就くために必要な技術や資格を取得するため、受講前に申請した後、指定された教育訓練講座を受講した方に、費用の60%（上限20万円）を支給します。

(担当部署：区福祉保健センター及びこども青少年局こども家庭課)

● 高等職業訓練給付金

看護師等の経済的自立に効果的な資格を習得する際に、修学期間中の生活費を補助します。また、終了後に、訓練終了支援金を給付します。

なお、平成28年度から、市社会福祉協議会で入学時・就職時の準備費用の貸付（一定の要件を満たせば返済免除）を行っています。

（担当部署：区福祉保健センター及び子ども青少年局こども家庭課）

● 高等学校卒業程度認定合格支援事業

高等学校を卒業していない（中退を含む）ひとり親家庭の親又は児童が、より良い条件での就業や転職へつなげるために高等学校卒業程度認定試験（高卒認定試験）の合格を目指す場合に、その学び直しのための受講費用の一部を支給します、

（担当部署：区福祉保健センター及び子ども青少年局こども家庭課）

9 母子家庭等就業・自立支援センター事業

● 就労相談

就労支援員が、児童扶養手当を受給されているひとり親に対し、区役所相談窓口に出向き、マンツーマンで相談を受け、一人ひとりに合わせた就労支援計画や書類の作成の支援をするほか、電話相談を行う等きめ細かに求職活動を支援します。就職後も定着支援や、より経済力を向上させるような職に転職するための支援等も行います。また保育の問題等、就労以外の相談についても区役所と連携しながら対応します。

（担当部署：区福祉保健センター及び子ども青少年局こども家庭課）

● 就職情報の提供・職業紹介・企業啓発

行政機関及び民間等からの求人情報を提供し、希望者へはあっせんも行います。また、事業主に対し、ひとり親の雇用に理解と協力を求めるため、啓発活動を行います。

（担当部署：子ども青少年局こども家庭課）

● 就職支援講座

ひとり親の就職に有用な技能講座（介護職員初任者講座等）を開催します。

（担当部署：子ども青少年局こども家庭課）

● 就職支援セミナー

ひとり親の就職時の基礎的知識や心構え、パソコン実技等を習得するセミナーを実施し、就職に向けたスキルの取得を図ります。

（担当部署：子ども青少年局こども家庭課）

10 横浜市中央職業訓練校

これから就職する場合や転職するひとり親家庭の親や生活保護受給者が、短期間で就職に役立つ知識や技術及び技能を身につけるための職業能力を開発します。

(担当部署：横浜中央職業訓練校)

1.1 ハローワークとの連携強化・雇用の促進

求人情報の迅速・円滑な提供と、効果的な指導が受けられるよう、ハローワークとの連携を強化し、雇用の促進します。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

● マザーズハローワーク 《対象：母子・寡婦》

求職活動の準備が整い、かつ具体的な就職希望を有する子育て女性等に対する就職支援サービスの提供を図ります。

● ジョブスポットの設置

横浜市とハローワークが連携し、区役所に就労支援窓口であるジョブスポットを開設し、ひとり親家庭の就労を支援します。

(3) 経済的な支援

<国制度の着実な実施>

ひとり親家庭となった経過は様々なことがあり、経済的に十分な準備ができていない場合は、生活を維持するために、児童扶養手当、児童手当やひとり親家庭等医療費助成が必要であり、対象となる家庭が適切に支援を受けられるように制度の周知を図ります。また、各種制度が、対象となる家庭の状況により適した運用となるよう、適宜国に要望していきます。

経済的自立に向けては、就労によることを基本と考えますが、就労困難な事情がある場合には、必要に応じて生活保護等の一般の施策を活用することにより、生活の安定を図ります。

また、本市独自の事業として、市内バス、市営地下鉄、金沢シーサイドラインの利用を対象として、児童扶養手当受給世帯及び母子生活支援施設入所世帯に特別乗車券を交付し、経済的負担を軽減します。

1.2 児童扶養手当・児童手当

児童扶養手当は、父母の離婚などで、父又は母と生計を同じくしていない子どもを養育している母、父等に手当を支給します。

児童手当は、中学校修了までの児童を養育している方に支給されます。なお、所得により支給額が異なります。

(担当部署：区福祉保健センター及びこども青少年局こども家庭課)

13 ひとり親家庭等医療費助成

ひとり親世帯等の方が病院等で受診した時、窓口で支払う自己負担額を助成します。

(担当部署：区福祉保健センター保険年金課及び健康福祉局医療援助課)

14 就学援助

お子さんを横浜市立小・中学校へ通学させるのに経済的な理由でお困りの方に対して、学用品費、修学旅行費、給食費などを援助します。

(担当部署：教育委員会事務局学校支援・地域連携課)

15 母子父子寡婦福祉資金の貸付

技能修得資金や修学資金等の各種資金を無利子又は低利でお貸しします。

(担当部署：区福祉保健センター及びこども青少年局こども家庭課)

16 特別乗車券交付事業

児童扶養手当受給世帯・母子生活支援施設入所世帯の方に、市営バス・民営バス（ただし、市外で乗車し、かつ降車する場合を除く）・市営地下鉄・金沢シーサイドラインの無料特別乗車券を交付します。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

17 寡婦（夫）控除のみなし適用

婚姻歴のないひとり親家庭が利用する子育てや福祉サービス等の受給判定及び負担額等の算定において、税法上の寡婦（夫）控除のみなし適用を実施し、対象家庭の経済的負担を軽減します。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

18 各種減免制度

所得の状況により、ひとり親世帯に対し費用の減免を行うことで、経済的負担を軽減しています。

- **水道料金等の減免**

水道料金・下水道使用料のうち、基本料金相当額を減免しています。（対象：ひとり親家庭等医療費助成を受けている方対象）

- **粗大ごみ処理手数料の減免**

粗大ごみの処理手数料が年間（4月から翌年3月まで）4個まで免除になります。（対象：ひとり親家庭等医療費助成を受けている方対象）

- **JR通勤定期割引**

JRの通勤定期代が3割引きになります。（対象：児童扶養手当受給世帯・生活保護世帯）

- **保育所等利用における負担軽減**

保育所等を利用する際の利用料や、私学助成を受ける幼稚園の保育料の一部を補助する私立幼稚園就園奨励補助金について、負担軽減を行っています。（所得による制限あり）

19 生活困窮者自立支援

生活保護に至る前の段階からお困りの状況に応じて、就職や家計の見直しなどにより、生活を立て直すことや、生活の安定をはかることができるよう支援します。

（担当部署：区福祉保健センター及び健康福祉局地域支援課）

20 生活保護

働く能力、資産、他の法律・制度で受けられる支援や、扶養義務者からの援助などを活用しても生活が困難な世帯の最低生活を保障するとともに、自立に向けて支援します。

（4） 養育費確保の支援

<養育費の確保が適切になされるための支援>

子どもの養育は、親権の有無に関わらずその責務は両親にあり、別居している親も養育費を負担し、扶養義務を果たす必要があります。

しかし、実際には、養育費は子どもにとっての権利であるにもかかわらず、確保がすすまない場合も多いことから、親の子どもに対する責務の自覚を促し、離婚する前からの意識付けや離婚時に取り決めを確実に行う必要性の周知を図るほか、個別の相談機能の強化に取り組みます。

具体的には、パンフレット等による制度周知や、国が委託で実施している「養育費相談支援センター」の機能を活用しながら、「横浜市母子家庭等就業・自立支援センター」で、制度の周知や弁護士による無料法律相談により、養育費に関する相談や啓発等を行います。

21 法律相談

養育費の取り決めについて、弁護士による法律相談を実施し、養育費の確保を図ります。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

22 養育費についての啓発

養育費の負担は、子どもの成長のために必要不可欠であり、子どもの親として義務であること等を啓発していきます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

(5) 相談機能や情報提供の充実

<様々な相談や情報提供の充実>

ひとり親家庭のニーズに合った情報や支援制度が、必要とする人にできるだけ適時適切に届くよう、相談機能や情報提供を充実させます。

平成29年度の本市の調査結果においても、制度の周知があまり図られていなかったことを受けて、制度や必要な情報の周知を強化していきます。情報の提供にあたっては、当事者団体と連携しながら、パンフレット等の紙媒体のみではなく、メールやウェブサイト等のインターネットの活用を含めて、様々な手法により、わかりやすく利用しやすいコンテンツにしていきます。

なお、児童扶養手当の現況届の集中受付の機会をとらえて、従来から実施している就労相談のみではなく、情報提供の場としての活用を図ります。

相談機能については、様々な課題を抱えた家庭の個々のニーズを踏まえ、一般の子育て等の施策とひとり親家庭への施策を組み合わせることなどにより、適切な相談や情報提供体制を充実させます。日中及び夜間の電話相談により、いつでも相談ができる体制を引き続き実施するとともに、法律相談等についても継続し、その中で離婚前相談も含め対応していきます。

また、区役所や関係機関などの相談を受ける支援者に対し研修を実施し、適切な相談スキルの習得を図るとともに、相談対応の充実を図ります。

ひとり親家庭の孤立を防ぐために、当事者同士の交流や仲間づくりなどに取り組んでいきます。また、情報提供の充実や多様な相談内容に対応していくために、当事者団体や関係機関・団体による連絡会を定期的に関催します。

なお、父子家庭に対する相談事業や情報提供について、充実させていきます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

23 相談・情報提供の充実

ひとり親を対象に、生活全般の相談にきめ細かく応じられるよう、相談・情報の強化を図ります。

● 区役所

区福祉保健センターの窓口での全般的相談・情報提供の他、福祉制度案内を充実し、利用の促進を図ります。

● 母子家庭等就業・自立支援センター

就労に関する相談以外に、ひとり親家庭の生活全般について、面接や電話（夜間含む）による相談の実施や情報の提供を行います。また、区との連携を強化し、相談支援機能の強化に取り組みます。

● 男女共同参画センター

女性からの総合相談窓口として、仕事、子育て、DVに関することなどの相談やセミナー等を実施します。

● 当事者団体・関係機関との連携

ひとり親家庭が必要とする情報を、当事者団体ならではのネットワークで情報を精査し、わかりやすい内容を、日常利用するコンテンツにより発信します。また、ひとり親の支援に関わる団体・関係機関の連携につとめ、多面的な支援の輪を広げていきます。

（担当部署：こども青少年局こども家庭課）

24 離婚前相談

DV被害者の方や離婚調停中の方等の離婚前の悩みについても、区役所の窓口や、母子家庭等就業・自立支援センターの離婚相談、夜間日常生活電話相談、法律相談、就労相談等で応じます。

（担当部署：区福祉保健センター及びこども青少年局こども家庭課）

25 支援者の研修

ひとり親家庭の相談全般に対応出来るよう支援者に研修を実施し、専門性の向上を図ります。特に、心理面の支援についての向上に努めます。

（担当部署：こども青少年局こども家庭課）

(6) 子ども自身へのサポート

<子どもの視点に立った支援策の展開>

経済的に困窮しているなど支援が必要な家庭の子どもに対し、学習支援を実施することで、学び意欲を醸成し、将来的な自立の促進を図ります。

また、学習支援事業や様々なひとり親の子どもと接する事業において、子どもが気軽に相談したり、子どもが相談しやすいような窓口やツールなど、様々な機会ですべてひとり親の子どもが気軽に相談できるような支援をすすめます。

面会交流支援事業については、離婚により別居している親と子どもを積極的に合わせる事業ではありますが、DVや児童虐待等があった場合には、面会の実施が必ずしも適切ではないこともあり、実施にあたっては、子どもの意志を十分確認するとともに、子どもの立場に立って調整していきます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

26 ひとり親の子どもの相談支援

子どもが自分から打ち明けて相談することはハードルが高いことも想定されます。そのため、学習支援や生活支援をはじめとした、様々な子どもと接する事業の支援者の方々に、ひとり親に関する状況や子どもの状態などの情報提供につとめ、子どもと接する際に、ちょっとした相談に耳を傾けていただけるような意識醸成につとめます。

また、ひとり親の子どもが相談しやすい窓口やルールなど、様々な機会ですべてひとり親の子どもが気軽に相談できるような支援をすすめます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

27 学習支援事業

経済困窮や養育に課題があり支援を必要とする小・中学生に対し、学習支援や生活支援を行います。

● ひとり親家庭児童の生活・学習支援

ひとり親家庭の児童に対し、食事の提供も含めた夕方以降の生活を支援するためのモデル事業を実施し、ひとりで家にいることが多いひとり親家庭の子どもの基本的な生活習慣の習得と健全育成をはかります。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

● 寄り添い型学習支援事業

生活保護世帯の子どもに対し、高校進学に向けた学習意欲の向上や学力の向上のための学習支援を充実し、安定した自立につなげます。

(担当部署：健康福祉局地域支援課)

● 寄り添い型生活支援事業

養育環境に課題がある、生活困窮状態にある、など支援を必要とする家庭に育つ小中学生等が、安心して過ごすことのできる環境の中で、基本的な生活習慣を身につけたり、将来の進路選択の幅を広げ自立した生活を送れるようにするため、生活スキルの習得や学習を支援します。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

● 放課後学び場事業

家庭での学習が困難であったり、学習習慣が十分に身につけていない中学生を対象に、大学生や地域住民等の協力による学習支援活動を実施しています。

(担当部署：教育委員会事務局学校支援・地域連携課)

28 面会交流支援事業

面会交流に関する知識啓発に努めるとともに、専門の相談機関を紹介するなど、子どもの健やかな育ちにつながる面会交流の支援に取り組みます。

(担当部署：こども青少年局こども家庭課)

29 子ども食堂など地域の取組支援

「子ども食堂」に対する地域の熱意が高まっている中、区社会福祉協議会を「地域における子どもの居場所づくりの相談窓口」として位置づけ、区社協を中心に、団体や新たに組みたい人を支援することにより、子どもにとって身近なエリアで「子ども食堂」等を増やしていき、地域の緩やかな見守りの輪づくりにつとめます。

(担当部署：こども青少年局企画調整課・区社会福祉協議会)

計画の進ちょく状況の把握

本計画全体を統括的に把握する指標として、「横浜市中期計画」並びに「横浜市子ども・子育て支援事業計画」にひとり親の自立支援の指標として設定している、次の目標を掲げ、推進していきます。

【指標1】就労の状況の把握

目標	現状値 (平成28年度末)	平成31年度	平成34年度
ひとり親の就労者数	1,022人(累計)	1,900人(累計)	推進 ※

【指標2】自立支援の状況の把握

目標	現状値 (平成28年度末)	平成31年度	平成34年度
ひとり親家庭等 自立支援事業利用者数	3,510人	5,300人	推進 ※

※最終年度の数値目標は、次期子ども・子育て支援事業計画の策定にあわせ設定していきます。

V 參考資料

平成25～29年度計画「支援の具体的計画」実績一覧と振り返り

項目	内容	実績			
		25年度	26年度	27年度	28年度
1 子育てや生活の支援					
1) 日常生活への支援					
ヘルパー派遣事業	病気や就職活動などにより、一時的に家事・育児等にお困りの方に、日常生活のお手伝いをする家庭生活支援員だけでなく、多様なヘルパーの派遣の充実を図ります。	日常生活支援事業利用者: 母子449人 寡婦0人 父子81人	日常生活支援事業利用者: 母子453人 寡婦0人 父子110人	日常生活支援事業利用者: 母子428人 寡婦3人 父子124人	日常生活支援事業利用者: 母子408人 寡婦1人 父子89人
子育て短期支援事業	保護者の疾病・疲労・夜間の急用や、休日に不在等の理由により、一時的に児童の養育が困難になった場合、児童家庭支援センター・乳児院で子どもを預かります。	利用者数:延べ 1276人	利用者数:延べ 3063人	利用者数:延べ 4683人	利用者数:延べ 4473人
2) 保育所への優先入所					
保育所への優先入所	未就学児のいる世帯が、安心して就労・求職活動等が行えるよう、保育所入所時の優先度をアップします。	保育所等の利用にあたり、支給認定基準を満たしているひとり親家庭について、利用調整における優先度を上げている。			
3) 市営住宅入居時の優遇					
市営住宅入居時の優遇	市営住宅申込時の当選率を一般より優遇し、入居しやすくします。	母子父子世帯当選戸数: 78戸(募集戸数 1,200戸)	母子父子世帯当選戸数: 101戸(募集戸数 1,253戸)	母子父子世帯当選戸数: 108戸(募集戸数 1,282戸)	母子父子世帯当選戸数: 99戸(募集戸数 1,250戸)
4) 民間住宅あんしん入居					
民間住宅あんしん入居	家賃等の支払い能力があるものの、連帯保証人がいないために民間賃貸住宅への入居が困難な方に対して、協力不動産店が住宅をあっせんし、協定保証会社が家賃等の債務保証を行います。	成約:1人	成約:1人	成約:0人	成約:1人
5) 子育てりびいん					
子育てりびいん	小学校修了前の子どもがいる世帯が安心して入居できるよう、子育て環境に適した賃貸住宅を横浜市が認定し、家賃補助を行います。	管理戸数:131戸	管理戸数:162戸	管理戸数:209戸	管理戸数:272戸
6) 母子生活支援施設					
施設の運営と環境整備	18歳未満の子どもを養育している母子家庭が、様々な事情から支援を必要としている場合に、安心して自立に向けた生活を営めるよう、子どもと一緒に入所できる母子生活支援施設を運営するとともに、その環境の改善を進めます。	8か所(155世帯)	8か所(153世帯)	8か所(146世帯)	8か所(162世帯)
フォロー支援職員の配置	母子生活支援施設利用者が退所後においても安定した生活を送ることができるよう、退所後1年間、世帯訪問及び電話相談等のフォロー支援を行います。	職員配置:6人	職員配置:7人	職員配置:6人	職員配置:7人

項目	内容	実績			
		25年度	26年度	27年度	28年度
2 就業の支援					
1) 母子家庭等自立支援給付金事業の実施					
自立支援教育訓練給付金事業の実施	職業能力開発のための講座を受講した場合、受講料の2割(上限10万円)を支給します。 ※28年度から6割(上限20万円)に変更。	支給:26人	支給:17人	支給:18人	支給:26人
高等技能訓練促進事業の実施	看護師等の経済的自立に効果的な資格の修業期間(上限2年)のうち、最後の1/2(上限18ヶ月)の期間に生活費を補助します。また、入学支援修了一時金を支給します。	支給:151人	支給:147人	支給:141人	支給:110人
2) 母子家庭等就業・自立支援センター事業の実施					
就労相談	就労支援員が、児童扶養手当を受給されているひとり親に対し、区役所相談窓口に出向き、マンツーマンで相談を受け、一人ひとりに合わせた就労支援計画や書類の作成の支援をするほか、電話相談を行う等きめ細かに求職活動を支援します。就職後も定着支援や、より経済力を向上させるような職に転職するための支援等も行います。また保育の問題等、就労以外の相談についても区役所と連携しながら対応します。	支援者数:481人 就労者数:314人	支援者数:473人 就労者数:303人	支援者数:376人 就労者数:189人	支援者数:284人 就労者数:143人
就職情報提供・職業紹介・企業啓発	行政機関及び民間等からの求人情報を提供し、希望者へはあっせんも行います。また、事業主に対し、ひとり親の雇用に理解と協力を求めるため、啓発活動を行います。	職業紹介:23人 企業訪問:13社	職業紹介:31人 企業訪問:56社	職業紹介:35人 企業訪問:9社	職業紹介:24人 企業訪問:14社
就職支援講座	ひとり親の就職に有用な技能講座(介護職員初任者講座等)を開催します。	介護職員初任者研修: 1回10人受講	介護職員初任者研修: 1回13人受講	介護職員初任者研修: 25人受講	介護職員初任者研修: 14人受講
就職支援セミナー	ひとり親の就職時の基礎的知識や心構え、パソコン実技等を習得するセミナーを実施し、就職に向けたスキルの取得を図ります。	適職発見セミナー: 6回102人受講	適職発見セミナー: 6回48人受講	適職発見セミナー: 6回37人受講	適職発見セミナー: 6回37人受講
3) 横浜市中央職業訓練校					
横浜市中央職業訓練校	これから就職する場合や転職するひとり親家庭の親や生活保護受給者が、短期間で就職に役立つ知識や技術及び技能を身につけるための職業能力開発を支援します。	ひとり親家庭向けの科目有り ひとり親家庭への優先枠を設けた科目有り 募集ちらしを区こども家庭支援課、母子家庭等就業・自立支援センター等に配布			
4) 在宅就業支援事業					
在宅就業支援事業	在宅でのICT技能の習得等により、新たな就労やより希望に合った職業への転職を支援します。 ※平成26年事業終了	訓練終了者数:55人	訓練終了者数:59人		
5) ハローワークとの連携強化・雇用の促進					
ハローワークとの連携強化・雇用の促進	求人情報の迅速・円滑な提供と、効果的な指導が受けられるよう、ハローワークとの連携を強化します。また雇用の促進についても検討していきます。	ジョブスポットの設置区数: 8区	ジョブスポットの設置区数: 13区	ジョブスポットの設置区数: 18区(完了)	-

項目	内容	実績			
		25年度	26年度	27年度	28年度
3 経済的支援					
1) 児童扶養手当・児童手当					
児童扶養手当・児童手当	児童扶養手当は、父母の離婚などで、父又は母と生計を同じくしていない子どもを養育している母、父等に手当を支給します。児童手当は、中学校修了までの児童を養育している方に支給されます。なお、所得により支給額が異なります。	児童扶養手当受給者数: 21,078人 児童手当受給者数: 307,405人	児童扶養手当受給者数: 20,869人 児童手当受給者数: 306,136人	児童扶養手当受給者数: 20,561人 児童手当受給者数: 303,572人	児童扶養手当受給者数: 20,089人 児童手当受給者数: 299,900人
2) ひとり親家庭等医療費助成					
ひとり親家庭等医療費助成	ひとり親世帯等の方が病院等で受診した時、窓口で支払う自己負担額を助成します。	受給対象者: 44,146人	受給対象者: 43,790人	受給対象者: 43,503人	受給対象者: 43,202人
3) 就学援助					
就学援助	お子さんを横浜市立小・中学校へ通学させるのに経済的な理由でお困りの方に対して、学用品費、修学旅行費、給食費などを援助します。	認定者数:39,593人	認定者数:38,108人	認定者数:37,415人	認定者数:36,417人
4) 母子・寡婦福祉資金貸付					
母子・寡婦福祉資金貸付	技能修得資金や修学資金等の各種資金を無利子又は低利でお貸しします。	件数:795件 金額:385,077千円	件数:761件 金額:365,010千円	件数:687件 金額:337,206千円	件数:628件 金額:311,351千円
5) 生活保護					
生活保護	働く能力、資産、他の法律・制度で受けられる支援や、扶養義務者からの援助などを活用しても生活が困難な世帯の最低生活を保障するとともに、自立に向けて支援します。	3,851世帯 ※ 母子世帯数(4月時点)	4,058世帯 ※ 母子世帯数(4月時点)	4,009世帯 ※ 母子世帯数(4月時点)	3,809世帯 ※ 母子世帯数(4月時点)
6) 特別乗車券交付事業					
特別乗車券交付事業	児童扶養手当受給世帯・母子生活支援施設入所世帯の方に、市営バス・民営バス(ただし、市外で乗車し、かつ降車する場合を除く)・市営地下鉄・金沢シーサイドラインの無料特別乗車券を交付します。	特別乗車券交付枚数: 18,221枚 シーサイドライン定期券交付枚数: 408枚	特別乗車券交付枚数: 18,089枚 シーサイドライン定期券交付枚数: 399枚	特別乗車券交付枚数: 17,852枚 シーサイドライン定期券交付枚数: 378枚	特別乗車券交付枚数: 17,560枚 シーサイドライン定期券交付枚数: 401枚
4 養育費確保の支援					
1) 法律相談					
法律相談	養育費の取り決めについて、弁護士による法律相談を実施し、養育費の確保を図ります。	法律相談: 121人427件(内養育費100件)	法律相談: 122人443件(内養育費108件)	法律相談: 135人428件(内養育費113件)	法律相談: 147人560件(内養育費133件)
2) 養育費についての啓発					
養育費についての啓発	養育費の負担は、子どもの成長のために必要不可欠であり、子どもの親として義務であること等を啓発していきます。	養育費セミナー: 2回25人	養育費セミナー: 2回22人	養育費セミナー: 3回30人	養育費セミナー: 4回45人

項目	内容	実績			
		25年度	26年度	27年度	28年度
5 相談・情報提供					
1) 相談・情報提供の充実					
相談・情報提供の充実	ひとり親を対象に、生活全般の相談にきめ細かく応じられるよう、相談・情報の強化を図ります。	区職員に対し各種事業の担当者説明会や「区新任子ども家庭支援担当職員研修」、「養育費に関する研修」等の実施により、支援者の専門性を向上させることによる窓口の充実を推進。			
2) 離婚前の相談					
離婚前の相談	DV被害者の方や離婚調停中の方等の離婚前の悩みについても、区役所の窓口や、母子家庭等就業・自立支援センターの夜間日常生活電話相談、法律相談、就労相談等で応じます。	電話相談:121件 法律相談:83件	電話相談:125件 法律相談:84件	電話相談:207件 法律相談:74件	電話相談:207件 法律相談:81件
3) 支援者の研修					
支援者の研修	ひとり親家庭の相談全般に対応出来るよう支援者に研修を実施し、専門性の向上を図ります。	5(1)に同じ			
6 子どもへのサポート					
1) ひとり親子ども相談					
ひとり親子ども相談	区役所等の日常生活相談において、ひとり親家庭に理解のある相談員が、子どもからの様々な相談に応じます。	5(2)に同じ			
2) 子ども自身の相談を受ける団体・機関との連携					
子ども自身の相談を受ける団体・機関との連携	子ども自身からの相談を受ける団体や機関に対し、ひとり親世帯の生活状況や支援制度等について情報提供等を行います。また、マザーズハローワーク等における子どもを対象とした職業教育事業等と連携し、子どもの将来に向けた意識付け等を支援します。	児童相談所や関係部署に自立支援計画を配布し、実態調査の結果や実施事業について情報提供。 母子家庭等就業・自立支援センターの夜間電話相談の中で、子ども自身からの相談を受け付ける旨を記載したチラシを配布。			
3) 学習支援事業					
学習支援事業(寄り添い型学習等支援事業) ※平成28年度より、以下の2事業に変更 ・寄り添い型生活支援事業(子ども青少年局所管) ・寄り添い型学習支援事業(健康福祉局所管)	経済困窮や養育に課題があり支援を必要とする小・中学生に対し、学習支援や生活支援を行います。	寄り添い型学習等支援事業実施区数: 12区	寄り添い型学習等支援事業実施区数: 18区	寄り添い型学習等支援事業実施区数: 18区	寄り添い型学習等支援事業実施区数: 18区
4) 面会交流支援事業					
面会交流支援事業	子どもの両親双方の面会交流についての条件等を調整し、面会を実施することで子どもの健やかな育ちにつなげます。	面会交流の理解と知識を深めるための市民向け講座の実施及び相談先の紹介(家庭問題情報センター(FPIC)・法テラス等)			

第3期計画の振り返り

第3期の主な取組	課題
<p>○ 子育てや生活の支援</p> <p>生活の場の安定を図るため、ヘルパー派遣事業の拡充や、疾病・疲労等により一時的に養育が困難になった場合に児童家庭支援センターなどで子どもを預かる子育て短期支援事業を拡充しました。</p> <p>保育所入所や市営住宅入所について引き続き優先度を高めるほか、生活面で重点的な支援が必要な母子については、母子生活支援施設において自立に向けた支援を行いました。</p>	<ul style="list-style-type: none">○ ヘルパー事業についてはニーズが高まっており、十分な財源や事業者の確保が急務となっています。○ 住宅の確保については市営住宅の優先枠を設けますが、それでも不十分との意見が多く、民間における低家賃住宅の更なる確保策が求められています。○ ひとり親家庭が安心して地域で暮らすことができるよう、引き続き地域での関係者のつながりづくりに取り組む必要があります。
<p>○ 就業の支援</p> <p>母子家庭等就業・自立支援センターの就労支援員を区に派遣し、就職活動の仕方から職業紹介まで、一人ひとりの状況に応じたマンツーマンによるきめ細かな就労支援を実施しました。</p> <p>在宅就業支援事業（H26 終了）を実施するとともに、各区役所内にハローワークの職業紹介窓口となるジョブスポットを設置しました。</p> <p>また、能力開発を行う訓練給付金事業や、ひとり親が働きやすい職場環境を備えた企業の開拓・確保を推進しました。</p>	<ul style="list-style-type: none">○ ひとり親の職探しは、就労形態と子育てとの両立の難しさから、希望と実際の就労にミスマッチが生じやすく、結果として非正規率が高くなり、子どもの貧困状況の要因のひとつとなっています。○ 貧困の連鎖の解消に向け、本人の状況や生活条件に即した、きめ細かな就業支援の推進が必要です。○ 収入の安定だけでなく、親の自己肯定感の高まりや子供への関わりが前向きになるなど、生活の安定にもつながるため、単なる就労の支援だけでなく、心理面のノウハウなど支援の質の向上が重要です。
<p>○ 経済的支援</p> <p>児童扶養手当、児童手当や医療費助成など、生活維持のための経済的給付に関する制度周知を実施しました。</p> <p>また、経済的負担の軽減のため、市内バス、市営地下鉄等の利用を対象とした特別乗車券を交付するとともに、貸付や奨学金の制度周知を実施しました。</p>	<ul style="list-style-type: none">○ 経済的支援は、一番助かるという声も多く、大きな支援になっています。一方、子供が大きくなり手当の対象から外れてから自立を模索しても、就職先が限られるなど厳しい現状もあり、中長期的な展望をもって、自立を支援していくことが必要です。○ 手当の対象でなくなった途端に各種制度も使えなくなり、生活の落差が大きいことが自立を躊躇することにつながる面もあるため、マネープランなど将来展望を示しながら、伴走型で支援するなどきめ細やかな支援が求められています。

第3期の取組

○ 養育費の確保

養育費の確保のためのパンフレット等により制度周知を強化しました。
(離婚前からの意識付けや離婚時の取決め)

両親の養育費の取り決めについて、弁護士による無料法律相談やセミナー等を実施しました。

○ 相談・情報提供

区役所こども家庭支援課、戸籍課等に名刺大の情報提供カードを配置し、相談窓口を周知しました。

また、メルマガの配信により、直接届く情報提供に努めました。

(6) 子どもへのサポート

学習意欲の醸成などを目的に、経済的困窮状態にある等、養育環境に課題があり支援を必要とするひとり親家庭の子どもに対する学習支援を実施しました。

課題

○ 民法改正などによる権利擁護の高まりを付け、養育費の相談や法律相談のニーズが増加しており、対応が求められています。

○ 離婚前からの情報提供について、戸籍課と連携するなど、制度周知の取組の強化が必要です。

○ 面会交流については、課題も多く、親の権利だけでなく、子どもの心理的影響に配慮し、子どもの希望を尊重するような支援が必要です。

○ 制度がよく知られていないという意見が多く、引き続きわかりやすい総合的な情報提供・相談機能の強化に取り組む必要があります。また、相談窓口におけるワンストップ的な対応が求められています。

○ 情報提供や相談が様々な場面で展開されるよう、当事者団体や関係機関による連携を促進し、多面的に取り組んでいく必要があります。

○ 貧困の連鎖の防止の視点から、子どもへの学習支援や生活支援など、子ども自身に届く支援の推進が重要となっています。

○ 地域では子ども食堂の取組がはじまっており、ゆるやかな地域の見守り機能としても取組が広がるよう、推進していく必要があります。

○ 現在の支援の取組は中学生から高校生への進学がメインとなっていますが、もっとはやく時期からの支援が必要との声が多く、小学生、幼児期からのかかわりも重要となってきています。

○ 給付型の奨学金も増えてきており、親だけでなく子どもへも制度周知をはかり、意欲につなげていくことも大切です。

横浜市ひとり親家庭アンケート調査結果の概要

1 調査の概要

(1) 調査目的

ひとり親家庭の生活実態に関する基礎的データの把握のため

(2) 調査期間・方法

平成 29 年 5 月 19 日から平成 29 年 6 月 5 日まで郵送配布・郵送回収により調査

(3) 調査対象・回収状況

住民基本台帳から平成 27 年の国勢調査上の横浜市の母子家庭の 15%、父子家庭の 45%を抽出率として、無作為抽出した。

	調査票送付数	調査票回収数	調査票回収率	調査対象該当数	調査対象該当率
母子家庭	2,600	903	34.7%	736	28.3%
父子家庭	1,000	283	28.3%	245	24.5%
合計	3,600	1,186	32.9%	981	27.3%

2 結果の概要

()内は、平成 24 年度前回調査

		母子世帯	父子世帯	全体
1 ひとり親になった理由	離別	77.0% (79.0%)	64.5% (83.3%)	73.9% (79.2%)
	死別	10.2% (9.9%)	31.0% (11.9%)	15.4% (10.0%)
	未婚	7.5% (6.4%)	0.4% (0%)	5.7% (6.1%)
	別居、その他	5.3% (4.7%)	4.1% (4.8%)	5.0% (4.7%)
2 住居の状況	賃貸住宅	46.8% (54.2%)	27.0% (23.9%)	41.7% (52.7%)
	持ち家	21.6% (23.5%)	49.4% (61.9%)	28.5% (25.4%)
	本人以外の名義の持ち家	25.4% (-)	18.8% (-)	23.8% (-)
	会社の社宅等、その他	6.2% (-)	4.8% (-)	5.9% (-)
	1 か月あたりの住居費	6.7 万円	9.2 万円	7.4 万円
3 平均年間世帯総収入	361 万円 (331 万円)	643 万円 (571 万円)	432 万円 (344 万円)	
4 平均年間就労収入	295 万円 (263 万円)	615 万円 (543 万円)	379 万円 (279 万円)	

5	就業率	86.3% (84.7%)	89.4% (90.5%)	87.1% (85.0%)	
6	就業形態	正社員・正規職員	44.6% (41.9%)	66.2% (76.3%)	50.1% (43.8%)
		パート・アルバイト	34.6% (38.6%)	2.7% (5.3%)	26.5% (36.8%)
		嘱託・契約社員・準社員・臨時職員	9.0% (11.8%)	7.8% (5.3%)	8.7% (11.4%)
		人材派遣会社の派遣社員	5.0% (3.6%)	0.5% (0%)	3.9% (3.4%)
		自営業主 (商店主・農業など)	5.0% (2.6%)	13.2% (13.1%)	7.1% (3.1%)
		会社などの役員	0.5% (-)	8.2% (-)	2.5% (-)
		自家営業の手伝い、その他	1.3% (1.5%)	1.4% (0%)	1.2% (1.5%)
7	平均就業時間	33 時間 (36 時間)	41 時間 (50 時間)	35 時間 (37 時間)	
8	職種	上位 1 位	事務的な仕事	専門知識・技術をいかした仕事	事務的な仕事
		上位 2 位	専門知識・技術をいかした仕事	管理的な仕事	専門知識・技術をいかした仕事
		上位 3 位	サービスの仕事 (資格なし)	建設の仕事	サービスの仕事 (資格なし)
9	副業率	8.3%	2.3%	6.8%	
10	養育費	取り決め率	47.2% (45.0%)	34.3% (18.9%)	44.6% (43.6%)
		受給率 (※)	45.5%	11.9%	38.6%
		1 か月あたりの受給額 (※)	5.8 万円	2.3 万円	5.5 万円
11	面会交流	取り決め率	30.4%	36.1%	31.6%
		実施率 (※)	58.3%	62.7%	59.2%

※過去に受給または実施していた場合を含む。

(1) ひとり親家庭の世帯状況について

ア 就業・収入について

ひとり親家庭の就業率は高く、母子家庭の就業率は 86.3%、父子家庭の就業率は 89.4% となっており、前回調査から大きな変化はありません。

母子家庭の就業形態は、「正社員・正規職員」が 44.6% となっていますが、「パート・アルバイト」(34.6%)、「嘱託・契約社員・準社員・臨時職員」(9.0%)、「人材派遣会社の派遣社員」(5.0%) を合わせた非正規職員は半数となっています。

一方、父子家庭の就業形態は、「正社員・正規職員」が66.2%となっていますが、母子家庭と比べ、「自営業主」（13.2%）や「会社などの役員」（8.2%）の割合が高くなっています。

副業の実施状況については、ダブルワークをしている母子家庭は8.2%、父子家庭は1.8%となっています。また、トリプルワークをしている母子家庭は0.2%、父子家庭は0.5%となっています。

年間の世帯総収入（児童扶養手当、養育費等を含む）の全体平均は432万円ですが、母子家庭のみでは約4割が300万円未満となっています。母子家庭の平均収入は361万円で、前回調査の331万円から大きな変化はありませんが、父子家庭の平均収入は643万円で、前回調査の571万円から増加しています。

また、平成28年国民生活基礎調査によると、「児童のいる世帯」の平均所得額は708万円となっており、ひとり親家庭の収入が低いことがわかります。特に、稼働収入については、「児童のいる世帯」647万円に対して、本市の母子家庭は295万円、父子家庭は615万円となっていて、母子家庭が非常に低いことがわかります。

イ 住居について

母子家庭は46.8%が賃貸住宅（「民間の賃貸住宅」、「市営・県営団地」、「公団住宅」）に住んでいます。父子家庭は49.4%が持家に住んでいます。

住居費については全体で73.1%が負担しており、母子家庭の平均住居費は6.7万円、父子家庭の平均住居費は9.2万円となっています。

ウ 養育費について

養育費について取り決めをしている世帯（「取り決めをしている」、「子によって違う」）は44.6%で、前回調査とほぼ同じです。養育費の受給状況については、「現在も受けている」が27.0%、「受けたことがあるが現在は受けていない」が11.6%となっています。

養育費の受給額については、全体平均は月額5.5万円ですが、母子家庭では月額5.8万円、父子家庭は月額2.3万円となっています。

エ 面会交流について

面会交流について取り決めをしていない世帯は62.7%です。面会交流の取り決めをしていない理由は、母子家庭では「相手と関わり合いたくないから」が41.6%と最も多く、父子家庭では「取り決めをしなくても交流できるから」が43.3%と最も多くなっています。

（2）ひとり親家庭の子どもについて

ア 小学生の放課後の居場所について

小学生の子どもが放課後（19時まで）に過ごしている場所は、「自宅」が61.7%と最も多くなっています。

1週間のうち、19時以降に子どもだけで留守番する頻度については、「ほとんどない」が71.0%と最も多くなっています。

イ 子どものことで悩んでいることについて

現在、特に悩んでいることについては、「子どもの教育費の負担」が最も多く、母子家庭では40.6%、父子家庭では20.0%となっています。次いで「子どもの進学や受験のこと」が母子家庭では16.8%、父子家庭では19.6%となっています。

(3) ひとり親家庭になったときに困ったこと

ひとり親家庭になったときに困ったこととして、「生活費が不足している」が57.6%で、次いで「炊事洗濯等の日常の家事ができない」38.9%となっています。

母子・父子家庭別にみると、父子家庭では母子家庭に比べ、「炊事洗濯等の日常の家事ができない」の割合が高くなっています。

また、アンケート調査の回答時点現在で困っていることについて、「生活費が不足している」については、39.6%と多くの人が挙げており、ひとり親となって時間が経過しても困っていることがわかります。

(4) 福祉制度の認知状況

福祉制度の認知状況については、「区役所福祉関連窓口」(71.2%)、「児童相談所」(84.3%)、「公共職業安定所(ハローワーク)」(91.3%)、「市営住宅」(82.0%)、「児童扶養手当」(91.4%)、「ひとり親家庭等医療費助成」(75.8%)、「就学援助」(70.7%)、「生活保護」(90.5%)、「バス・地下鉄等の特別乗車券交付」(73.0%)の認知度は高くなっています。

「ジョブスポット」(12.6%)、「母子・父子家庭高等職業訓練促進給付金」(16.5%)、「ひとり親家庭高等学校卒業程度認定試験合格支援」(8.6%)、「民間住宅あんしん入居」(9.8%)、「子育て短期支援事業」(10.1%)、「寄り添い型学習支援・寄り添い型生活支援」(7.7%)、「夜間電話相談」(13.0%)の認知度は低くなっています。

福祉制度を知った方法については、「区役所の相談窓口」(50.2%)、「ひとり親家庭のしおり」(40.6%)、「横浜市のホームページ」(19.2%)といった行政の広報が多くなっていますが、「友人・知人」の割合も17.2%となっています。

様々な福祉制度について利用したかったが利用できなかった理由については、「利用しなかった時に制度を知らなかったから」が42.1%で最も多くなっています。

「ひとり親サポートよこはま」の連絡先を載せた情報カードを平成26年10月から区役所の窓口で配布していますが、認知度は14.9%となっています。

(5) 相談相手について

相談相手がいる母子家庭は74.9%、父子家庭は49.8%となっています。相談相手が欲しい母子家庭は12.6%、父子家庭は20.4%となっています。

ひとり親の方や、そのお子さん同士が交流できるイベントやサークル活動があった場合、参加してみたい母子家庭は22.3%、父子家庭は29.4%と、父子家庭の方が高くなっています。

ヒアリング調査結果の概要

1 ヒアリング状況

	ヒアリング対象		実施日
1	民生委員・児童委員	主任児童委員連絡会	7/13
2	市社協	市社会福祉協議会事務局	7/21
3	保育園	市立保育園課長園長会議（課長園長）	6/21
4	幼稚園	市内私立幼稚園4園 （うち認定こども園2園）	7/4～ 7/11
5	小・中学校	方面別学校教育事務所	7/7
6	地域子育て支援拠点	横浜子育てパートナー連絡会議	6/27
7	母子生活支援施設	施設長会議	7/10
8	横浜市男女共同参画センター	男女共同参画センター横浜	7/24
9	ひとり親関連事業受託法人	2事業者 （日常生活支援事業、児童家庭支援センター事業、ひとり親の生活・学習支援モデル事業、寄り添い型生活支援事業 受託法人）	6/30 及び 7/14
10	区こども家庭支援課	区こども家庭課社会福祉職幹事区会（CW専任職、CW）	6/1
11	区生活支援課	健康福祉局生活支援課（CW※区生活支援課業務経験者）	7/28
12	当事者団体①	一般社団法人 横浜市母子寡婦福祉会	8/13
13	当事者団体②	一般社団法人 日本シングルマザー支援協会	7/27
14	当事者団体③	NPO法人 しんぐるまざーず・ふぉーらむ	7/24

2 主なヒアリング項目

- ・ひとり親家庭の状況、親・子どもの様子
 - ・ひとり親として生活をしていく上で、あるいは支援をしていく上で課題・困難に感じていること
 - ・ひとり親家庭への支援として有効と考える支援
 - ・今後より一層必要と考えられる支援の内容
- 等

3 ヒアリングから見えてきた状況

(相談)

- ひとり親の方は、忙しい合間をぬって相談に来ているので、なかなか余裕がない。区役所も土日が開いてるわけではない。余裕をもって十分な情報提供を受けられるよう、相談に乗れる体制が必要。(支援者)
- 養育費の確保や様々な支援など、もっと離婚時から事前に情報を知ることができていれば、ここまで困窮に至らず済んだのでは、と後になって思う。(当事者)
- 戸籍の窓口で離婚時から相談にのるなど、早いうちからの情報提供が大事だ。(支援者)

(子どもへの支援・教育)

- ひとり親の子は、わりと早いうちから人生をあきらめがちであるように感じる。不安定な親や、弟妹を自分が支えなければと、自らそこにアイデンティティを置いている場合もあるが、もう少しその子の生活・学習の機会が保証されてもよいのではないか。(支援者)
- できれば早いうちからの学習支援、子どもに直接届く支援が必要。(支援者)
- 子どもにはできるだけ進学して、困窮状況から巣立ってほしいと思っているが、進学費(学費以外にも必要なこまごまとした経費も)が重荷であり、将来が不安。(当事者)
- 子どもは、親の様子をみて、これ以上無理をさせられないと、進学をあきらめてしまうケースも依然多い。奨学金などの情報は大人への情報が中心となっているが、もっと子どもの後押しになるような、子ども目線の情報提供ができないものだろうか。(支援者)

(自立支援)

- 子どもが大きくなって児童扶養手当がなくなってから、自立となっても、就職先が厳しく、気づくのが遅いという印象が否めない。はやい時期から自立を支援していかないと、依存せざるをえず、なかなか困窮状態の解消は厳しい。(支援者)
- 自立をしたくない人はゼロである。児童扶養手当の受給時と、そこから少し稼ぎがアップして離脱した時の様々な優遇策がなくなることのギャップが大きい。離脱した人には例えば一定期間税が優遇される、あるいはひとり親医療が一定期間は使えるといったような緩和策も必要(当事者)
- ひとり親になった理由は様々でも、共通しているのは喪失感。自己否定感が(親子ともに)低い部分を高めていくことも、自立支援には必要。(支援者)

(福祉的課題)

- ひとり親であること自身が課題ではなく、ひとり親×〇〇と他の課題が重なり深刻化する。ひ

とり親の抱える課題状況をカテゴライズし、その層その層ごとの支援が必要。（支援者）

○福祉的課題が強い世帯は、ひとり親であるからというより、その他の要因が大きいように思う。子どもが障害を抱えているだけでなく、親自身も障害を抱えていたりする。障害を抱える子、方への支援も並行しながらひとり親支援を考えることも重要ではないか。（支援者）

（住宅）

○住宅に関する困難が大きいと感じている。他都市ではひとり親への住居費手当などあったりするが、もう少しひとり親が入りやすい住宅の確保・施策が必要ではないか。（支援者）

○やはり、横浜市は家賃が高い。10万近くがザラだ。公営住宅はなかなかあたらない。住宅費に費やすお金を減らすことができれば、その分、収入がアップしたことと同じで、貯蓄など子どもへ回せるお金も増える。現在は、公営住宅にあたった人はラッキー、という状況だ。（当事者）

（父子への支援）

○母子だけでなく、父子家庭への支援も必要。特に子の育ちからみた生活面の支援。（支援者）

○父親がそれでいい、と思っていることが、子の育ちからみると課題がある場合も多い。母子と比べて父子への支援の少なさをみると、もう少し積極的な支援ができないものか。また、当事者同士の意見交換の機会などもあってよいのではないか。（支援者）

（地域展開）

○区役所に行くのがハードルが高いと感じているひとり親の方の様子もうかがえる。もっと身近な相談窓口が必要なのではないだろうか。拠点でも、ひとり親同士の交流などもっと考えていってよいと思うが、そのノウハウがない（支援者）

○地域でのよりそい、つながりづくりの必要性和“主たるかかわりを持つ人”をどうつくるか。高齢者の地域支援の仕組みのようなものが、ひとり親など困難を抱える子育て世帯にもあるとよい。（困難な高齢者を地域ケアプラザの地域コーディネーターに相談できるような感じで）（支援者）

○子ども食堂や、地域の人たちによる学習支援といった取組は有効と思っている。子どもだけでなく多世代支援にもつながるし、そのようなゆるやかな見守り機能が地域には必要で、尽力したいと思っている。ただ、今のところ、本当はきてほしい、課題を抱えている子どもたちが子ども食堂に来ているかという、まだそういう状況ではない。（支援者）

横浜市ひとり親家庭自立支援計画策定連絡会

● 委員

	所属	役職	氏名
1	(公財)横浜市男女共同参画推進協会	事業企画課長	白藤 香織
2	母子生活支援施設 カーサ野庭	施設長	高橋 智一
3	(社福)横浜市社会福祉協議会	地域活動部長	田邊 裕子
4	(社福) たすけあいゆい	理事長	濱田 静江
5	本間法律事務所	弁護士	本間 春代
6	マザーズハローワーク横浜	統括職業指導官	松田 利花
7	(一財)横浜市母子寡婦福祉会	理事長	道下 久美子
8	横浜市民生委員児童委員協議会	理事	峰松 雅子
9	立教大学コミュニティ福祉学部	教授	湯澤 直美

(50音順・機構順 敬称略)

10	鶴見区こども家庭支援課	課長	中澤 智
11	横浜市南浅間保育園	園長	西川 洋子
12	瀬谷区こども家庭支援課	課長	柴山 一彦
13	横浜市中心職業訓練校 (経済局雇用労働課担当課長)	校長	石川 裕純
14	健康福祉局生活支援課	課長	鈴木 茂久
15	建築局住宅政策課	課長	磐村 信哉

● 事務局

	所属	役職	氏名
	こども青少年局こども家庭課	こども福祉保健部長	細野 博嗣
	こども青少年局こども家庭課	企画調整課長	福嶋 誠也
	こども青少年局こども家庭課	保育・教育運営課長	武居 秀頼
	こども青少年局こども家庭課	課長	谷口 千尋

7 計画推進にあたっての指標

本計画全体を統括的に把握する指標として、「横浜市中期計画」並びに「横浜市子ども・子育て支援事業計画」にひとり親の自立支援の指標として設定している、次の指標を掲げ、推進していきます。

【指標1】就労の状況の把握

目標	現状値	平成31年度	平成34年度
ひとり親の就労者数	1,022人(累計)	1,900人(累計)	推進 ※

【指標2】自立支援の状況の把握

目標	現状値	平成31年度	平成34年度
ひとり親家庭等自立支援事業利用者数	3,510人	5,300人	推進 ※

※最終年度の数値目標は、次期子ども・子育て支援事業計画の策定にあわせ設定していきます。

8 今後のスケジュール（予定）

日程	予定
平成29年12月	常任委員会（素案説明）
12月中旬～平成30年1月末	市民意見募集
3月	常任委員会（原案説明）
3月末	計画の策定

意見募集

（意見募集に関する情報を
記載予定）

（意見募集はがきスペース）

横浜市ひとり親家庭自立支援計画（平成30年度～34年度）素案 概要

1 計画の策定にあたって

（1）計画の位置づけ

〇本市では、母子及び父子並びに寡婦福祉法に基づき、「ひとり親家庭自立支援計画」を策定し、総合的な支援施策を進めています。過去3回（第1期：平成15年度～19年度、第2期：平成20年度～24年度、第3期：平成25年度～29年度）策定し、今回4期目（平成30年度～34年度）の計画を策定します。

（2）基本方針

〇児童の健全な成長が確保されるよう、ひとり親家庭の自立を支援することにより、その世帯の生活の安定と向上を図ることを目的として策定します。

2 ひとり親家庭の現状と課題

「平成29年度横浜市ひとり親世帯アンケート調査」結果並びにヒアリング調査の結果を踏まえ、外部有識者を交えて策定連絡会で検討し、次のとおり、ひとり親家庭の現状と課題を整理しました。

（1）子育てや生活支援

- *ひとり親は、一人で生計の維持と子育てを担う負担を抱え、何かと「忙しい」「余裕がない」状況です。
- *DVや児童虐待の問題、疾病や障害など、他の様々な課題を抱えている場合もあり、ひとり親の約4分の1は、が「健康状態に課題を抱えている」と回答しています。
- *特に父子家庭では「家事支援」へのニーズが高くなっています。

（2）就業の支援

- *母子家庭の85%、父子家庭の91%が就労。しかし、父子の正規就労率が66%であるのに対し、母子家庭の母は、パート、嘱託などの非正規職員が50%近くを占め、収入、就業形態、雇用環境、子育てとの両立など、本人の希望する職業とのマッチングに課題があります。

（3）経済的支援

- *母子家庭の約4割が児童扶養手当、養育費等を含む年間の総収入が300万円未満に留まり、ひとり親家庭になって困ったこととして、多くの人々が「生活費が不足している」と回答しています。

（4）養育費確保の支援

- *離婚などによりひとり親家庭の子どもへ支払われるべき養育費について、半数近くの世帯で取り決めがなく、養育費確保の浸透に向けて、普及・啓発活動の強化が必要です。

（5）相談・情報提供

- *認知度が低く利用が低調な制度もあり、効果的な情報提供が求められています。また、相談支援の窓口が行政、民間機関などに分散しているため、個々の家庭状況に応じた適切な機関へつなげることが課題です。
- *相談だけでなく、心理面のサポートを必要とする場合も多くあります。

（6）子どもへのサポート

- *DVや児童虐待などにより心のケアが必要な場合や、就業などの理由で、親が子育ての時間を取れず、親子の関わりが少ない状況もみられる。
- *貧困の連鎖防止の視点から、学習支援や生活支援、面会交流支援など、子ども自身への支援の充実が必要です。

3 社会的背景

(1) 子どもの貧困の問題における、ひとり親家庭の深刻さ

平成28年国民生活基礎調査の結果では、子どもの貧困率は13.9%と3年前の前回調査の16.3%から低下し、数値的にはやや改善に向かっていますが、ひとり親家庭の貧困率は5割を超え、依然としてひとり親は厳しい状況に置かれています。

(2) 権利擁護の高まり

平成24年の民法等の改正により、離婚の際の親子の面会交流や子の監護に要する費用の分担などが明確になる一方、面会交流における死亡事件などをはじめとする、さまざまな課題も表出してきました。子どもにとって望ましい養育費の確保や面会交流のあり方が、課題となっています。

(3) 父子家庭ならではの支援ニーズの増加・対応の必要性

平成26年度の母子及び父子並びに寡婦福祉法改正により、支援の対象を父子家庭にも拡大しましたが、父子家庭は母子家庭に比べ、比較的収入があるために、ひとり親の支援事業に該当しにくいことや、日常生活の支援の必要性、孤立感など、母子家庭とは異なるニーズへの対応が求められています。

(4) 教育費負担の増加傾向～給付型奨学金の導入

世帯所得に占める教育費の割合が増大しており、また奨学金の貸与を受けても、返済が滞るなど、教育費の確保が課題となっています。日本学生支援機構の奨学金に給付型が導入されたり企業が新たにひとり親向けの給付型奨学金を募集するなど、民間資金の給付型奨学金も増えてきています。

4 基本的な方向性

これまでの計画を振り返り、ひとり親家庭の現状と課題を踏まえ、計画を推進するにあたり、次の3つの視点と5つの重点を、推進にあたっての基本的な方針として位置づけます。

■ 3つの視点 ■

- 貧困の連鎖の解消に向けた、伴走型の自立支援（親の自己肯定感を高める）
- 子どもに届く支援、子どもの視点に立った支援（子どもの自己肯定感を高める）
- 地域展開の取組の推進（ピアサポートや地域のつながりづくりにより孤立を防ぐ）

■ 5つの重点 ■

① 子育てや生活支援から就業支援までの総合的支援

従来の計画でも進めてきた生活費の確保や資格取得、職業紹介等の就業支援だけでなく、子育てや心身の健康、家事などの生活支援から就業支援までの総合的支援を充実させます。

② ニーズに応じた適切な相談支援

様々な課題を抱えた家族の個々のニーズを踏まえ、一般の子育て等の施策とひとり親家庭への施策を組み合わせることなどにより、適切な相談や情報提供体制を充実させます。

③ 積極的な情報提供

支援制度が知られていないため利用に至らない現状があるため、わかりやすく、身近で利用しやすい制度案内について、父子家庭も含め、積極的な情報提供に取り組みます。

④ 当事者同士の交流と支援者の連携

当事者同士の交流や仲間づくりに取り組むと共に、支援機関・団体等が相互に連携し、ひとり親家庭が孤立せず、地域の中で温かく見守られながら、自立を目指すことを支援します。

⑤ 子どもへの支援

親との離死別やDV・児童虐待等により受ける子どもの心理的影響にも配慮しながら、貧困の連鎖を防ぐための学習支援や子どもの希望を尊重したうえでの親との面会交流支援など、子どもの視点に立った、子ども自身への支援を進めます。

5 主な取組内容

(1) 子育てや生活支援

- 日常生活支援（ヘルパー派遣）事業 ●子育て短期支援事業 ●横浜子育てサポートシステム ●保育所への優先入所 ●市営住宅入居時の優遇 ●民間住宅あんしん入居 ●子育てりびいん ●新たな住宅のセーフティネット ●母子生活支援センター ●児童家庭支援センター ●子育て世代包括支援センター ●ひとり親サロンの地域展開 など

(2) 就業の支援

- 教育訓練給付金 ●母子家庭等就業・自立支援センター事業（就労相談、就職支援講座、企業啓発） ●就職支援セミナー ●ジョブスポット ●マザーズハローワーク ●横浜市中央職業訓練校 など

(3) 経済的支援

- 児童扶養手当 ●児童手当 ●ひとり親家庭等医療費助成 ●母子父子寡婦福祉資金（貸付） ●特別乗車券交付事業 ●就学援助 ●寡婦（夫）控除のみなし適用 ●各種減免制度 ●生活保護 ●生活困窮者自立支援 など

(4) 養育費確保の支援

- 養育費セミナーなどの啓発 ●法律相談 ●養育費相談支援センター等の専門相談窓口の紹介 など

(5) 相談・情報提供

- 区役所や母子家庭等就業・自立支援センター、男女共同参画センター等における相談・情報提供 ●離婚前相談 ●支援者への研修 ●当事者団体・関係機関の連携強化 など

(6) 子どもへのサポート

- ひとり親の子どもの相談支援 ●学習支援事業 ●面会交流支援 ●子ども食堂など地域の取組支援 など

6 計画の構成

I 計画策定の趣旨

- 1 計画の位置づけ
- 2 計画の期間
- 3 策定の経緯

II ひとり親家庭の現状と課題

- 1 ひとり親家庭の現状
- 2 ひとり親家庭の課題状況
- 3 社会的背景

III 支援の基本姿勢

- 1 支援の基本的姿勢

IV 支援の具体的計画

- 1 子育てや生活の支援
- 2 就業の支援
- 3 経済的支援
- 4 養育費確保の支援
- 5 相談機能や情報提供の充実
- 6 子どもへのサポート

V 参考資料

（意見募集はがきスペース）

施策展開の考え方

その家庭ごとの自立の状態をみながら、大きく層立てを行い、より適した支援につながるよう市取組をすすめていきます。

自立の状態度合（下に行くほど、自立へ向けた困難度が高い）

主な取組事業

